長崎県芦辺町文化財調査報告書　第３集

カ ジ ヤ バ 古 墳

―壱岐郡芦辺町国分川迎触字平原所在―

1988

長 崎 県 芦 辺 町 教 育 委 員 会

長崎県芦辺町文化財調査報告書　第３集

カ ジ ヤ バ 古 墳

―壱岐郡芦辺町国分川迎触字平原所在―

1988

長 崎 県 芦 辺 町 教 育 委 員 会

発刊のことば

このたび，当町の国分川迎触にあるカジヤバ古墳の調査報告書を刊行するはこびとなりました。

当古墳は，昭和48年頃の道路改良工事の際，破壊されていたもので，その安否が気づかわれておりました。

今回，再度の道路改良工事が計画され，緊急発掘調査を実施したものです。

当初の予測と違って，墳丘こそ半壊状態でしたが，石室は4分の3，羨道にいたっては未盗掘の状態で残存しており，関係者として，胸をなでおろした次第です。

61年10月に発掘調査，62年3月に5m北側に移築復原工事，63年3月に環境整備工事と，ひととおりの形をととのえることができ，関係者一同大変喜んでおります。今後とも町内に残されている数多くの文化財の保護，顕彰に鋭意取り組んでまいりたいと考えております。

最後になりましたが，本調査，移築復原工事等の諸般にわたってご指導賜わった県文化財保護審議会委員石丸太郎氏，県文化課主任文化財保護主事副島和明氏，県文化課文化財研究員本田秀樹氏に深甚の謝意を表したいと思います。

昭和63年3月31日

芦辺町教育長

野　元　茂　生

例　　言

1. 本書は壱岐郡芦辺町国分川迎触字平原311番地に所在するカジヤバ古墳の緊急発掘調査の結果報告書である。
2. 調査の事業主体は芦辺町教育委員会，調査担当は長崎県教育委員会が行った。
3. 調査期間は昭和61年10月13日～昭和61年11月4日（23日間）まで実施した。
4. 調査関係者

芦辺町教育委員会	野元茂生	教育長
	高田　博	前教育長，現助役
	長嶋邦昭	教育次長
	榎本俊寛	学校教育係長
	原田登志子	学校教育係
（調査担当）	田口唯雄	社会教育主事
	川上豊次	社会教育主事補
	浦川　巧	社会教育主事
長崎県教育庁文化課	田川　肇	調査係長
（調査担当）	副島和明	主任文化財保護主事
（　〃　）	本田秀樹	文化財研究員
調査指導	石丸太郎	県文化財保護審議会委員
調査協力者	佐々木正禧	（移築復原地の所有者）

5. 本書は分担執筆した。
   Ⅰ．Ⅴを副島が，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを本田が執筆した。
   （巻頭写真の写真撮影は藤田和裕主任文化財保護主事が行った）
6. 本書の編集は副島，本田による。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2

Ⅲ　調　　査 ……13

1．墳　丘 ……13
2．主体部 ……16
3．遺物出土状況 ……17
4．出土遺物 ……23
(1)　土　器 ……23
(2)　鉄　器 ……28

Ⅳ　まとめ……30

Ⅴ　移築・復原作業 ……33

挿　図　目　次

第１図　カジヤバ古墳位置図①…… 2
第２図　カジヤバ古墳位置図②（1/10,000）…… 3
第３図　周辺の遺跡分布図（1/25,000）…… 6
第４図　周辺地形図（1/600）……11・12
第５図　墳丘実測図（左：調査前，右：調査後）（1/200）……13
第６図　石室平面図（1/100）……14
第７図　墳丘断面実測図（1/40）……15
第８図　石室実測図①（1/40）……18
第９図　石室実測図②（1/40）……19・20
第10図　玄室内遺物出土状況（1/20）……21
第11図　羨道部遺物出土状況（1/20）……22
第12図　玄室内出土土器（1/3）……23
第13図　羨道部出土土器（1/3）……25
第14図　カジヤバ古墳表採土器①（1/3）……27
第15図　カジヤバ古墳表採土器②（1/6）……28
第16図　玄室内出土鉄器（1/2）……28
第17図　閉塞部出土鉄器（1/2）……29
第18図　カジヤバ古墳出土鉄器（1/2）……29

表　目　次

表１　遺跡地名表①…… 7
表２　遺跡地名表②…… 8
表３　遺跡地名表③…… 9
表４　遺跡地名表④……10

図　版　目　次

図版１　①墳丘・調査前（西から）……37
②墳丘・調査後（西から）……37
図版２　①墳丘断面（西から）……38
②墳丘断面近景（西から）……38
図版３　①墳丘調査前全景（南から）……39
②墳丘清掃後全景（南から）……39
③墳丘清掃後全景（南東から）……39
④墳丘清掃後の天井石検出状況（北東から）……39
⑤石室検出状況（北から）……39
⑥玄室全景（南から）……39
⑦玄室全景（南東から）……39
⑧羨道部から玄室を望む（西から）……39
図版４　①玄室近景（南から）……40
②玄室北側壁（南から）……40
③羨道部閉塞状況（西から）……40
④石室掘り方（北から）……40
⑤玄門部閉塞状況（東から）……40
⑥玄室奥壁（西から）……40
⑦玄室南側壁（北から）……40
図版５　①玄室内遺物出土状況（東から）……41
②羨道部遺物出土状況（西から）……41
③羨道部遺物出土状況（北から）……41
④閉塞部遺物出土状況（西から）……41
図版６　①玄室内出土土器（1/3）……42
②羨道部出土土器（1/3）……42
図版７　カジヤバ古墳表採土器（1/3）……43
図版８　カジヤバ古墳出土鉄器（1/2）……44
図版９　カジヤバ古墳移築，復原作業……45
図版10　調査風景……46

Ⅰ　調査に至る経過

壱岐島のほぼ中央部分で芦辺町と勝本町の町境付近には，亀石・布気・百合畑・山の神・百田頭・釜蓋・京塚山古墳群が形成され，中でも双六古墳（前方後円墳），鬼の窟古墳（矢櫃古墳・県指定史跡），笹塚，兵瀬古墳などの横穴式石室を有する大きな古墳や島分寺跡，壱岐氏居館跡等遺跡が集中する地域[註1]である。

この地域に含まれ，芦辺町内に国片主神社付近から住吉神社付近の国道382号線に接続する町道川迎線が走っている。

当該道路の改良工事（住吉後～国分川迎地区）が計画され，カジヤバ古墳の立地する丘陵部分を残し一部着工されていた。当古墳は昭和48年に改良工事が行われた際に，墳丘および石室の一部が破壊され，道路断面に石材が露出している状況であった。

遺跡の取扱いについて町建設課，町教育委員会，県教育委員会の３者で協議を行い，昭和61年10月に現地踏査を実施した。その後に設計変更等の協議を重ねたが，すでに道路工事も古墳の周囲を残し，近くまで進行した状況であったので，記録保存処置を実施することになった。

昭和61年10月13日～昭和61年11月４日（23日間）まで，町教育委員会が調査主体で，発掘調査を県教育庁文化課が担当して実施した。

また，発掘調査の段階で石室の一部は破壊されていたが，ほぼ現形を維持し，石室と羨道部分の境は閉塞された状態で検出されたので，町教育委員会は調査後に移築復原作業を実施することになった。

昭和62年３月23日～昭和62年３月27日（５日間）まで，約５ｍ程北側に移築復原を実施した。

註１　長崎県教育委員会『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書　第87集　1987

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境

壱岐はその昔「広さ三百里平方ばかり，竹林・叢林多く，三千ばかりの家あり。やや田地あり，田を耕せども，なお食するに足らず，また南北に市糴す。」と『魏志倭人伝』に記された島である。当時の壱岐の環境を端的に書き表わすのに，これほど適切な文章はない。対馬と共に九州と朝鮮半島の間に位置し，古くから大陸文化伝播の重要な役割を担ってきた。

東西約15㎞，南北約17㎞，面積約140㎢のこの島も，今では行政的に郷ノ浦，勝本，石田，芦辺の４町に分かれ，人口約４万人にのぼる。海路と空路で福岡，佐賀，長崎と結ばれ，人的・物的交流の窓口は九州本土へ向いている。かつての歴史的役割は，そこには余り感じとれない。

島の地形は，大半が標高100ｍ前後，丘陵性の低平な溶岩台地で，最も高い岳ノ辻でも標高213ｍを測るにすぎない。島の基盤は第三紀層で，その表面は玄武岩で覆われる。当古墳の所在する国分地区は，アルカリ長石に富む玄武岩溶岩地帯である。島の北部は石英玄武岩が多く灰色を呈した緻密で板状の大きな岩塊は，古墳等に利用されている。壱岐に古墳が多いのも，このような石材の供給源を近くに持っているという所以かもしれない。

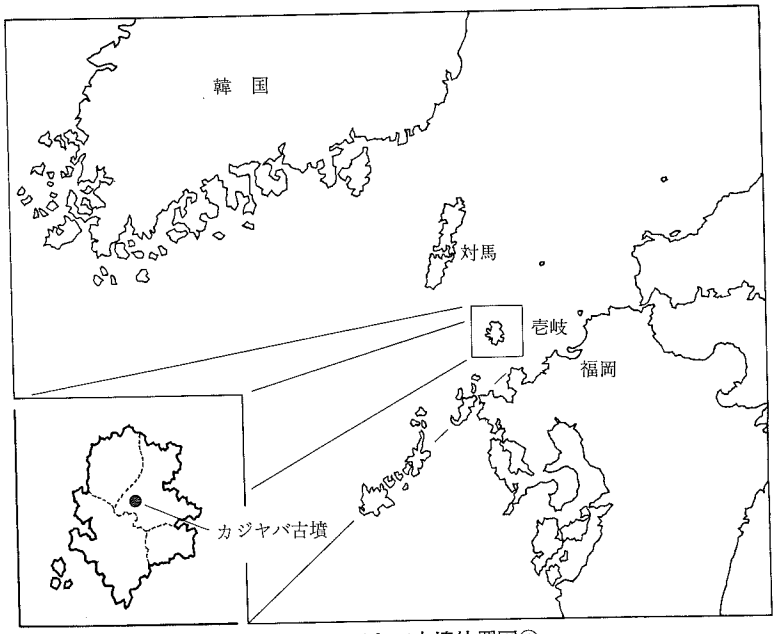
カジヤバ古墳は島の中央部からやや北側寄りに位置し，芦辺町内でも西の方にあたる。当古墳の北約350ｍを県道湯本～芦辺線が走り，今回調査の契機となった町道川辺線は，南西に下って郷ノ浦，勝本間を結ぶ国道382号線へとつながる。

壱岐全島での遺跡数は，現在447を数える。(註1) 芦辺町内では101ケ所の遺跡が確認されている。

では，以下壱岐島内の主な遺跡を，各時代ごとに概観してみよう。

先土器時代の遺跡は数が少ない。興触遺跡，(註2) 原の辻遺跡(註3)（芦辺・石田町）でナイフ形石器・台形石器・細石刃・細石核などが採集されている他，カラカミ遺跡(註4)（勝本町）の国柳地区でも，細石核の採集が知られている程度である。

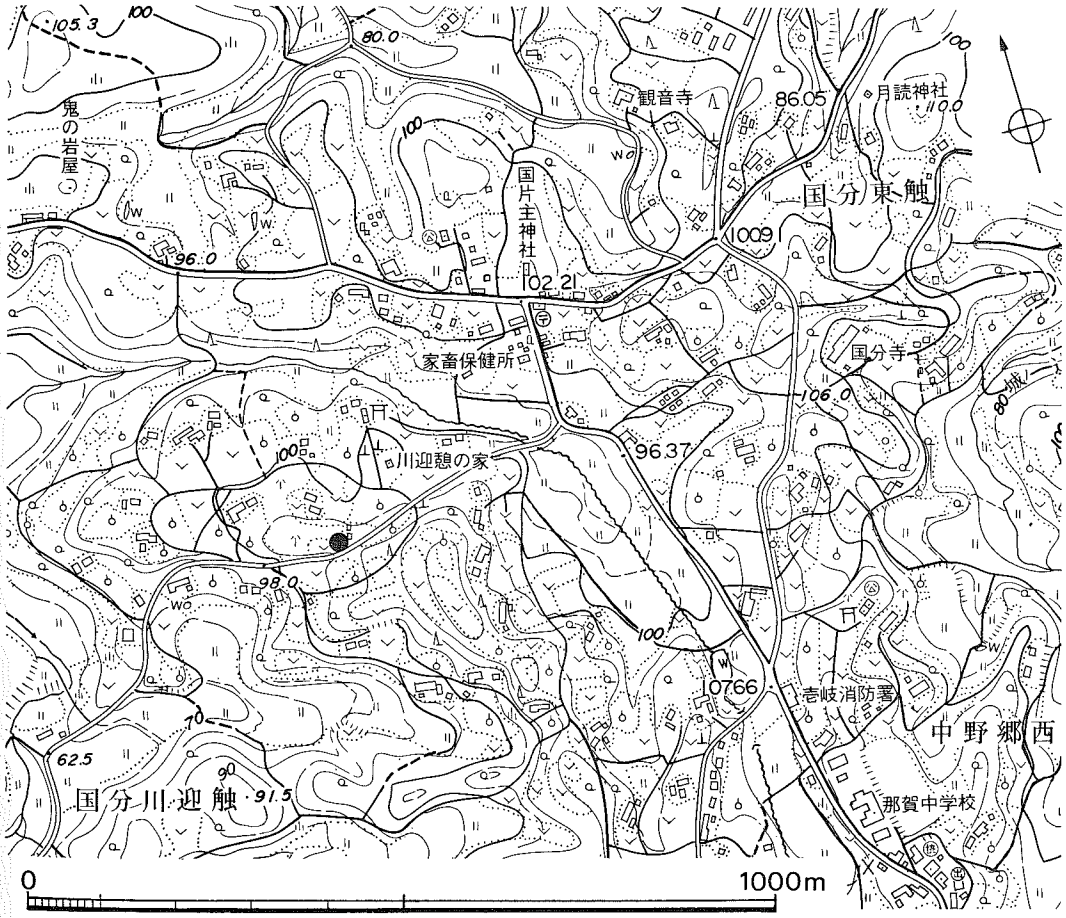
縄文時代では，前・中期の土器を出土した松崎遺跡(註5)（勝本町）や，名切遺跡(註6)・鎌崎遺跡(註7)（郷ノ浦町）などが挙げられよう。名切遺跡は，中・後



第１図　カジヤバ古墳位置図①

期の土器を中心に，貯蔵穴や多数の漁撈遺物・晩期の磨研浅鉢土器や突帯文土器が出土している。また鎌崎遺跡は，後期を中心に，石斧・スクレイパーなどの石器類が出土する。

弥生時代では，何といっても原の辻遺跡(註8)（芦辺・石田町）とカラカミ遺跡(註9)（勝本町）に代表されよう。原の辻遺跡は，これまで数度にわたって調査が行われ，弥生中・後期の遺跡として広く知られている。幡鉾川よりも一段高い段丘上に立地し，周囲には島内最大の沖積平野もひかえている。遺構では，竪穴式住居跡やV字溝等の集落遺構と，甕棺墓・石棺墓といった墓域とが併存しており，大規模集落の存在がうかがえる。また遺物でも，多数の中・後期土器に加え，陶質土器や貨泉，戦国式銅剣や漢式鏡といった中国・朝鮮系のものが出土するなど，大陸文化の窓口の一つであったことを示している。一方，カラカミ遺跡は，刈田院川に南面する標高70～80mの丘陵上に立地し，平野部の原の辻遺跡とは好対照をなす。近年の調査によって，大溝状遺構や甕棺墓等の遺構の存在が，断片的にではあるが明らかになった。大量の中・後期土器を中心に，陶質土器・青銅器・鉄器・骨角器・卜骨など，豊富な遺物の出土する遺跡として知られている。



第2図　カジヤバ古墳位置図②　(1／10000)

壱岐島内の古墳の数は，現在確認されているだけでも263基[註10]。かつては，338基[註11]とも，283基[註12]，296基[註13]とも言われており，その数を正確に把握するのは今日でも難しい。芦辺町内には72基の古墳を数え，その大半がここ国分本村触周辺に集中する。

5世紀代の古墳では，俵山古墳，大塚山古墳[註14]（芦辺町）がある。どちらも，原の辻遺跡を眼下に臨める丘陵頂部に立地する。俵山古墳は竪穴式石室，大塚山古墳は竪穴系横口式石室を内部主体にもつ。

6・7世紀代になると，古墳の数は圧倒的に増加する。芦辺町内では，山ノ神古墳群（91～95），百田頭古墳群（99～106），釜蓋古墳群（107～113），京塚山古墳群（123～129）など40基余りが国分地区にあり，カジヤバ古墳もその一角を占める。また，それと隣接する勝本町立石東，布気，百合畑地区にも，亀石古墳群（61・64・67・68・72），布気古墳群（27～34），百合畑古墳群（36～58）などが挙げられる。ここで壱岐全体の，1/3強の古墳が集中することになる。

周辺の代表的な古墳を紹介すると，芦辺町の鬼の窟古墳（97）がまず第一に思い浮かぶ。壱岐最大規模の円墳で，墳丘は東西51m，南北53m，高さ15mを測る。内部主体は，玄室と3つの前室からなる横穴式石室で，総全長は約16m。玄室は広さ3m四方，ドーム状に石積みされた天井部までは3.4mある。7世紀前後の古墳であろう。この他，兵瀬古墳（98）も墳丘径34m，高さ8mを測る大きな円墳である。内部主体は横穴式石室で，玄室と2つの前室からなる。石室全長は約12m，玄室高は2.7m。勝本町では，笹塚古墳（59），掛木古墳（25）が代表的である。笹塚古墳は，鬼の窟古墳に次ぐ規模をもつ円墳で，墳丘径40m，高さ13mを測る。内部主体に玄室と2つの前室をもち，全長14.8m。玄室には，板石を四壁に組んだ石棺がある。掛木古墳は，径15m，高さ4mを測る円墳で，3室に分かれた横穴式石室をもつ。石室全長は12.3m。玄室内には，凝灰岩製の刳抜式家形石棺がある。

一方，前方後円墳は国分周辺地区で9基を数え，中でも有名なのが双六古墳（65）と対馬塚古墳（79）である。双六古墳は，全長77m，前方部最大幅27m，後円部高5mを測り，壱岐島内最大の古墳である。内部主体は横穴式石室で，玄室と細長い複室をもつ。6世紀末から7世紀前半の時期が考えられている。対馬塚古墳は，全長54m，後円部高6mで，後円部が高く前方部が低い前期古墳の様相を呈する。後円部に盗掘坑はあるが，棺材は露出しておらず，竪穴式石室の可能性もある。出土遺物は明確ではない。この他，百田頭5号墳（103）は舟の線刻，山ノ神5号墳（95）は同心円文の線刻をもつ古墳として特異である。

古墳時代以降の遺跡では，大谷第一・第二・第三遺跡（117・116・120）や月読神社前遺跡（118）などの遺物包含地があるが，未調査のため詳細不明。館遺跡（119）では，たたら遺構が確認されている。特筆すべきは，壱岐国分寺跡（122）であろう。これまで「国分」の地名と礎石・古瓦の出土等から，場所は推定されていたものの，内容については殆ど不明な状態であった。しかし，昭和62年度の第一次確認調査[註15]で，一辺が6.6m四方の塔？基壇を検出。出土

した12,000点による瓦片の中からは，平城宮造営の際に使用されたものと同型式の軒丸瓦が見つかった。これによると，8世紀初頭頃の時期が考えられ，国分寺建立の詔以前にさかのぼる資料として興味深い。当時の豪族，壱岐直の氏寺を国分寺に充てたとする古記録(註16)を，裏付けるものとも言えるだろう。

以上，概述してきたことをまとめると，大方次のようになろう。弥生時代に，原の辻・カラカミと二大地域に集中した遺跡は，急速に衰退しつつも，古墳時代前半頃まで名残りをとどめる。その後，次第に国分地区へ文化の中心が移動し，やがては壱岐の政治的中枢へと発達していくことになる。カジヤバ古墳周辺は，壱岐の後期古墳文化の中心地であり，この地に居館を構えたとされる壱岐直等，豪族とも縁の深い土地である。古墳の集中は，これらと全く切り離しては考え難く，今後の検討課題として残るであろう。

註 1 『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書　第87集　長崎県教育委員会　1986
2 藤田和裕編『原の辻遺跡』長崎県文化財報告書　第26集　長崎県教育委員会　1976
3 水野精一，岡崎敬編「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』1959
藤田和裕編『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書　第31集　長崎県教育委員会　1977
4 正林　護，宮崎貴夫編『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書　第3集　勝本町教育委員会　1985
5 『松崎遺跡試掘調査概要報告』勝本町教育委員会　1979
6 安楽　勉，藤田和裕編『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書　第71集　長崎県教育委員会　1985
7 田中良之，横山　順「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』No. 54　九州考古学会　1979
8 註2，註3文献と同じ。この他，『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書　第37集　1978
9 註4文献と同じ。
10 註1文献と同じ。
11 『壱岐国続風土記』1742（寛保2年）
12 『壱岐郷土史』1721（享保6年）
13 『未完甲子夜話』
14 副島和明編『大塚山古墳』芦辺町文化財調査報告書　第2集　芦辺町教育委員会　1987
15 昭和63年度にわたって調査継続。報告書未刊。文化課・高野晋司氏より御教示。
16 『延喜式』玄蕃寮に「壱岐島直氏寺，為島分寺，置僧五口」の記載がみえる。

第3図 周辺の遺跡分布図

表1　遺跡地名表①

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構 遺物 備考
1	日影1号墳	勝本町本宮南触字日影	古墳	古墳	<註1>
2	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
3	〃 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
4	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
5	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	積石塚9基，円墳2基 <註1>
6	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	竪穴式石室3基 <註1>
7	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
8	〃 8号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
9	〃 9号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
10	〃 10号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
11	〃 11号墳	〃 〃 〃	〃	〃	<註1>
12	〃 12号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（径6.5m　高1.2m） <註1>
13	〃 13号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（径5.0m　高1.0m） <註1>
14	〃 14号墳	〃 〃 〃	〃	〃	（径3.0m　高0.7m）竪穴式石室？（1.9m×0.5m） <註1>
15	〃 15号墳	〃 〃 〃	〃	〃	（径4.0m　高0.7m） <註1>
16	〃 16号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（径3.4m　高0.5m） <註1>
17	〃 17号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（径12.0m　高1.5m）箱式石棺 <註1>
18	〃 18号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（径5.0m　高0.5m） <註1>
19	平田古墳	〃 〃 字鳥越	〃	〃	封土なし　石室のみ残る <註2>
20	鳥井神社古墳	〃 〃 〃	〃	〃	箱式石棺　直刀　管玉　須恵器　青銅2　人骨 <註3>
21	水ノ元1号墳	〃 布気触字水ノ元	〃	〃	円墳（径10.0m　高2.0m）　横穴式石室（玄室2.0m×1.9m） <註1>
22	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	小さな墳丘が痕跡的に残る <註1>
23	明神山1号墳	〃 〃 字明神	〃	〃	円墳（径8.0m　高1.5m）竪穴式石室？　大半は崩壊 <註1>
24	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（高4.0m）横穴式二石室（玄室2.4m×1.3m　全長6.0m） <註1>
25	掛木古墳	〃 〃 字掛木	〃	〃	円墳（径15.0m　高4.0m）横穴式石室（全長12.3m） 玄室には刳抜式家形石棺あり <註1>
26	道元古墳	〃 〃 字中尾	〃	〃	円墳（径25.0m　高5.0m） 横穴式石室（玄室3.3m×3.0m　全長11.1m） <註1>
27	布気古墳群1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	（高1.5m）横穴式石室　半壊　石室の一部が残る <註1>
28	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（径13.0m　高1.5m） 横穴式石室（玄室1.65m×1.9m　全長5.0m）線刻？ <註1>
29	〃 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	（径2.5m　高1.0m） <註1>
30	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	積石塚 <註1>
31	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳（径12.0m　高1.0m）横穴式石室 <註1>
32	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	（径17.0m　高1.5m） 横穴式石室（玄室1.8m×1.0m　全長3.2m） <註1>
33	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室（玄室1.9m×1.4m） <註1>
34	〃 8号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘の大半は削られ，石室はなくなっている
35	大清水池遺跡	〃 〃 字原野田・森尻	包含地	古・奈	奈良時代の製塩土器，須恵器 <註4>
36	百合畑古墳群1号墳	〃 百合畑触	古墳	古墳	前方後円墳（長25.0m　高5.0m） <註1>
37	〃 2号墳	〃 〃	〃	〃	円墳（径7.0m　高1.5m） <註1>
38	〃 3号墳	〃 〃	〃	〃	前方後円墳？（長13.0m　高2.5m） <註1>
39	〃 4号墳	〃 〃	〃	〃	封土なし（高0.5m）横穴式石室（玄室1.6m×1.3m　全長5.0m） <註1>

表２　遺跡地名表②

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構　遺物　備考	
40	百合畑古墳群５号墳	勝本町百合畑	古墳	古墳	円墳？（径10.0m　高2.0m）横穴式石室（玄室1.4m×1.6m）	＜註１＞
41	〃　６号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径10.0m　高4.0m）横穴式石室	＜註１＞
42	〃　７号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（高3.0m）横穴式石室（玄室2.2m×1.9m　全長3.7m）	＜註１＞
43	〃　８号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（高3.0m）横穴式石室（全長5.0m）	＜註１＞
44	〃　９号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径8.0m　高1.5m）	＜註１＞
45	〃　10号墳	〃　〃	〃	〃	須恵器（横瓶）出土？	＜註１＞
46	〃　11号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径10.0m　高2.0m）横穴式石室	＜註１＞
47	〃　12号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径5.0m　高1.0m）竪穴式石室？	＜註１＞
48	〃　13号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径15.0m　高5.0m） 横穴式石室（玄室1.8m×1.8m　全長5.3m）	＜註１＞
49	〃　14号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径10.0m　高2.0m）横穴式石室	＜註１＞
50	〃　15号墳	〃　〃	〃	〃	前方後円墳？（長10.0m　高2.0m）	＜註１＞
51	〃　16号墳	〃　〃	〃	〃	前方後円墳？（長18.0m　高2.0m）	＜註１＞
52	〃　17号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径6.0m　高1.0m）横穴式石室	＜註１＞
53	〃　18号墳	〃　〃	〃	〃	円墳　横穴式石室（玄室2.1m×2.1m　全長7.5m）	＜註１＞
54	〃　19号墳	〃　〃	〃	〃	円墳	＜註１＞
55	〃　20号墳	〃　〃	〃	〃	前方後円墳（長26.0m）	＜註１＞
56	〃　21号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径5.0m　高1.0m）	＜註１＞
57	〃　22号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径5.0m　高2.0m）	＜註１＞
58	〃　23号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径6.0m　高3.0m） 横穴式石室（玄室2.0m×1.5m　全長4.2m）	＜註１＞
59	笹塚古墳	〃　〃　字笹塚	〃	〃	円墳（径40.0m　高13.0m） 横穴式石室（全長15.0m）前室・中室・後室に分れる	＜註１＞
60	城山１号墳	〃　〃　字城山	〃	〃	円墳（径10.0m）横穴式石室（全長1.5m）	＜註１＞
61	亀石９号墳	〃　〃　字笹塚	〃	〃	円墳（径20.0m　高5.0m） 横穴式石室（玄室2.5m×1.9m　全長5.0m）	＜註１＞
62	双塚１号墳	〃　立石東触字双塚	〃	〃	円墳（高5.0m）横穴式石室（玄室2.9m×2.1m　全長8.36m）	＜註１＞
63	〃　２号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径6.2m　高5.0m） 横穴式石室（玄室2.8m×2.2m　全長8.2m）	＜註１＞
64	亀石８号墳	〃　〃　〃	〃	〃	封土なし	＜註１＞
65	双六古墳	〃　〃　字双六	〃	〃	前方後円墳（全長77.0m　前方部最大幅27.0m　後円部高5.0m） 横穴式石室（全長10.9m）	＜註１＞
66	人羅古墳	〃　〃　字二塚	〃	〃	円墳（径27.0m　高6.5m） 横穴式石室（玄室3.0m×2.3m　全長9.0m）	＜註１＞
67	亀石４号墳	〃　〃　字茶屋元	〃	〃	円墳（径10.0m　高2.5m）横穴式石室（玄室1.6m×？m）	＜註１＞
68	〃　５号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（高2.0m）石室は崩壊	＜註１＞
69	高峰遺跡	〃　〃　字大石	包含地	弥・古	弥生土器　土師器　黒曜石剝片　磨製石斧	
70	高峰古墳	〃　〃　〃	古墳	古墳	円墳（径8.0m　高5.0m）箱式石棺　勾玉１　碧玉製管玉　臼玉１ 小玉１	＜註１＞
71	大石古墳	〃　〃　〃	〃	〃	封土なし　石室の一部が残る　金環	＜註１＞
72	亀石１号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径10.0m　高2.0m）半分削られる	＜註１＞
73	若宮神社古墳	〃　立石仲触字立石	〃	〃	円墳　箱式石棺　鎧（短甲）直刀　土器　人骨	＜註３・４＞
74	一本松古墳	〃　〃　〃	〃	〃	横穴式石室（玄室2.0m×1.75m　全長5.2m）石室のみ残る	＜註１＞
75	立石２号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径4.5m）横穴式石室（玄室？m×1.3m）半壊	＜註１＞
76	〃　１号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径17.0m　高3.0m）横穴式石室（玄室？m×3.3m）半壊	＜註１＞
77	布代２号墳	〃　〃　字布代	〃	〃	円墳　横穴式石室　石室不明　削平	＜註１＞
78	〃　１号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径10.0m　高5.0m）横穴式石室（2.6m×2.3m　全長9.4m）	＜註１＞

表3　遺跡地名表③

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構 遺物 備考
79	対馬塚古墳	勝本町立石東触字国柳	古墳	古墳	前方後円墳（全長54.0m　後円部高6.0m）竪穴式石室？ <註1>
80	匹合古墳	〃　立石仲触字立石	〃	〃	円墳　墳丘が残る <註4>
81	牛神遺跡	〃　立石東触字国柳	墳墓	弥生	甕棺　箱式石棺 <註4>
82	国柳遺跡	〃　〃　〃	〃	先～古	細石刃核　剝片鏃　骨角器　敲石　甕棺　弥生土器　須恵器　石鍋 <註4>
83	カラカミ遺跡	〃　〃 字カラカミ・国柳	包含地	弥生	甕棺　V字溝　弥生土器　須恵器　土師器　陶質土器　銅鏃　骨角器 <註5>
84	小場遺跡	〃　立石仲触字鯨伏	墳墓	〃	甕棺　箱式石棺 <註4>
85	経ノ辻遺跡	〃　〃　字椿多	包含地	〃	V字溝　弥生土器 <註5>
86	下松2号墳	芦辺町住吉後触下松	古墳	古墳	円墳（径10.0m　高2.0m）横穴式石室　半壊 <註1>
87	〃　1号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径15.0m　高5.0m）石室は羨道のみ残る <註1>
88	柴取神辻2号墳	〃　国分本村触字仮塚国分	〃	〃	円墳（径15.0m　高4.0m）ゴルフ場建設のため完全消滅 <註1>
89	〃　4号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径9.0m　高2.0m）横穴式石室（玄室1.4m×？m） <註1>
90	山ノ神古墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径10.0m　高2.6m） 横穴式石室（玄室2.8m×2.2m　全長6.0m）ほぼ原形 <註1>
91	山ノ神1号墳	〃　〃　字京塚国分	〃	〃	前方後円墳　玄室のみ残る 横穴式石室（玄室2.2m×1.8m　全長4.6m） <註1>
92	〃　2号墳	〃　〃　〃	〃	〃	（径8.0m　2.0m） 横穴式石室（玄室2.4m×1.8m）道路で半壊 <註1>
93	〃　3号墳	〃　〃　字仮塚	〃	〃	円墳（径10.0m　高1.5m） 横穴式石室（玄室2.4m×1.5m　単室構造）倉庫で半壊 <註1>
94	〃　4号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径3.8m　高1.7m）崩壊している <註1>
95	〃　5号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径4.7m　高0.7m）横穴式石室 <註1>
96	小オニヤ古墳	〃　〃	〃	〃	大部分壊滅 <註1>
97	鬼の窟古墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径53.0m　高15.0m） 横穴式石室（玄室3.0m×2.6m　全長16.0m）壱岐最大墳 <註1>
98	兵瀬古墳	〃　〃　字兵瀬	〃	〃	円墳（径34.0m　高8.0m） 横穴式石室（玄室2.9m×2.4m　全長12.0m）周溝あり <註1・4>
99	百田頭1号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径6.0m　高1.0m） <註1>
100	〃　2号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径12.0m　高4.0m） <註1>
101	〃　3号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径6.0m　高1.5m）半壊 <註1>
102	〃　4号墳	〃　〃　字国分	〃	〃	円墳（径6.0m　高1.5m）横穴式石室（玄室？m×1.6m）半壊 <註1>
103	〃　5号墳	〃　〃　仮塚国分	〃	〃	円墳（径10.0m　高5.0m） 横穴式石室（玄室2.9m×2.0m　全長6.3m）舟の線列 <註1>
104	〃　6号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径10.0m　高3.0m） 横穴式石室（玄室2.4m×1.8m　全長5.0m）ほぼ完全 <註1>
105	〃　7号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳？（高3.0m）小さな石で構築（ドーム状） <註1>
106	〃・8号墳	〃　〃	〃	〃	低平な封土　竪穴式石室？ <註1>
107	釜蓋1号墳	〃　〃　字釜蓋国分	〃	〃	横穴式石室（玄室1.9m×1.7m　全長3.7m） <註1>
108	〃　2号墳	〃　〃　字兵瀬国分	〃	〃	円墳（径14.0m　高6.0m）封土⅓消失 <註1>
109	〃　3号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径6.0m　高3.0m） 横穴式石室（玄室2.25m×1.9m　全長4.6m）須恵器出土 <註1>
110	〃　4号墳	〃　〃　字国分	〃	〃	円墳（径10.0m　高4.0m）横穴式石室 <註1>
111	〃　5号墳	〃　〃　字兵瀬	〃	〃	円墳（径15.0m　高6.0m）両方削平 <註1>
112	〃　6号墳	〃　〃　〃　国分	〃	〃	円墳（径6.0m　高2.0m） 横穴式石室（玄室2.0m×1.85m　全長6.3m） <註1>
113	〃　7号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳　墳丘半分消失，横穴式石室　半分壊滅 <註1>
114	通触遺跡	〃　中野郷通触	包含地	弥・古	弥生土器　須恵器　石斧　黒曜石　近世陶磁器 <註4>
115	ムギカミ神社古墳	〃　〃　西触	古墳	古墳	円墳？　横穴式石室　天井石露出　半壊状態 <註1>
116	大谷第2遺跡	〃　国分東触	包含地	弥・古	弥生土器　土師器　須恵器
117	〃第1遺跡	〃　〃	〃	〃	弥生土器　土師器　須恵器

表4　遺跡地名表④

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構 遺物 備考
118	月読神社前遺跡	芦辺町国分東触	包合地	弥・古	弥生土器　土師器　須恵器　青磁
119	館遺跡	〃　国分本村触字館山	〃	古・奈	たたら遺構　土師器　鉄片　<註6>
120	大谷第3遺跡	〃　〃　〃	〃	古・鎌	黒曜石原石　弥生土器　土師器　須恵器　高麗青磁　鉄
121	壱岐氏居館跡	〃　国分国片主神社敷地	館跡	奈・平	空掘　土塁
122	壱岐国分寺跡	〃　国分本村触	寺跡	〃	塔基壇　礎石　瓦溜め　軒丸瓦　軒平瓦　布目瓦等　<註7>
123	京塚山1号墳	〃　〃　国分	古墳	古墳	円墳（径5.0m　高2.0m）横穴式石室　<註1>
124	〃　2号墳	〃　〃	〃	〃	（径2.0m×高0.5m）封土僅かに残存　竪穴式石室 石材一部露出　<註1>
125	〃　3号墳	〃　〃　国分	〃	〃	（高1.6m）竪穴式石室（1.3m×0.4m）　<註1>
126	〃　4号墳	〃　〃　〃	〃	〃	円墳（径7.0m　高5.0m）石室の一部が露出　<註1>
127	〃　5号墳	〃　〃	〃	〃	封土なし　竪穴式石室？　<註1>
128	〃　6号墳	〃　〃	〃	〃	（径3.0m　高0.5m）封土僅かに残る　横穴式石室　半壊　<註1>
129	〃　7号墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径8.0m　高1.5m）竪穴式石室　<註1>
130	小原1号墳	〃　国分川迎触	〃	〃	円墳（高4.0m）横穴式石室（玄室2.2m×？m）石室が見えている<註1>
131	〃　2号墳	〃　〃	〃	〃	円墳　半壊　<註1>
132	カジヤバ古墳	〃　〃	〃	〃	円墳（径11.0m　高1.4m） 横穴式石室（玄室1.6m×2.4m　全長4.2m）木棺　本報告書掲載
133	大原3号墳	〃　〃　字大原	〃	〃	墳丘は残存しない　天井石・側石が露出
134	平原3号墳	〃　〃　〃	〃	〃	墳丘・石室とも半壊　石室内から土師器椀出土
135	大原2号墳	〃　〃　〃	〃	〃	墳丘は残存しない　天井石・側石が露出
136	〃　1号墳	〃　〃　〃	〃	〃	墳丘は残存しない　一部を削平されているが，石室はほぼ完全
137	長野古墳	〃　住吉東触長野上	〃	〃	墳丘東側の一部を削平　墳丘長10.0m 横穴式石室（玄室2.1m×1.5m）天井石が落下

遺跡地名表　註

註1　松永泰彦「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐』第15号　壱岐史蹟顕彰会　1981

2　『勝本町文化財地図』1978

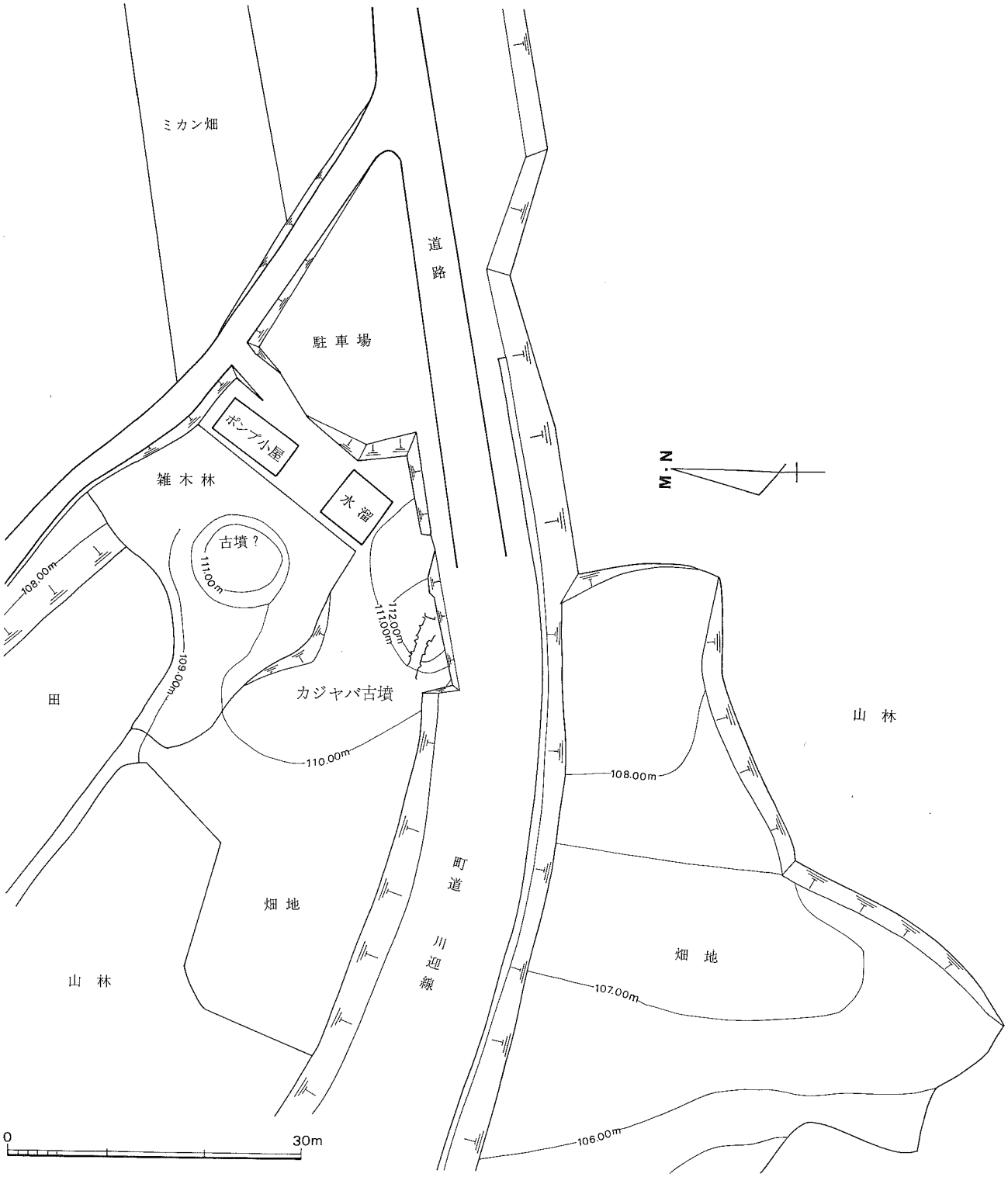
3　小田富士雄「対馬・壱岐の古墳文化」『東アジア世界における日本古代史講座』第2巻

4　『長崎県遺跡地名表』長崎県文化財調査報告書　第1集　長崎県教育委員会　1962

5　『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書　第3集　勝本町教育委員会　1984

6　昭和51年の九州大学の調査による。

7　昭和62年度長崎県文化課が行った第1次範囲確認調査による。文化課高野晋司氏より御教示。

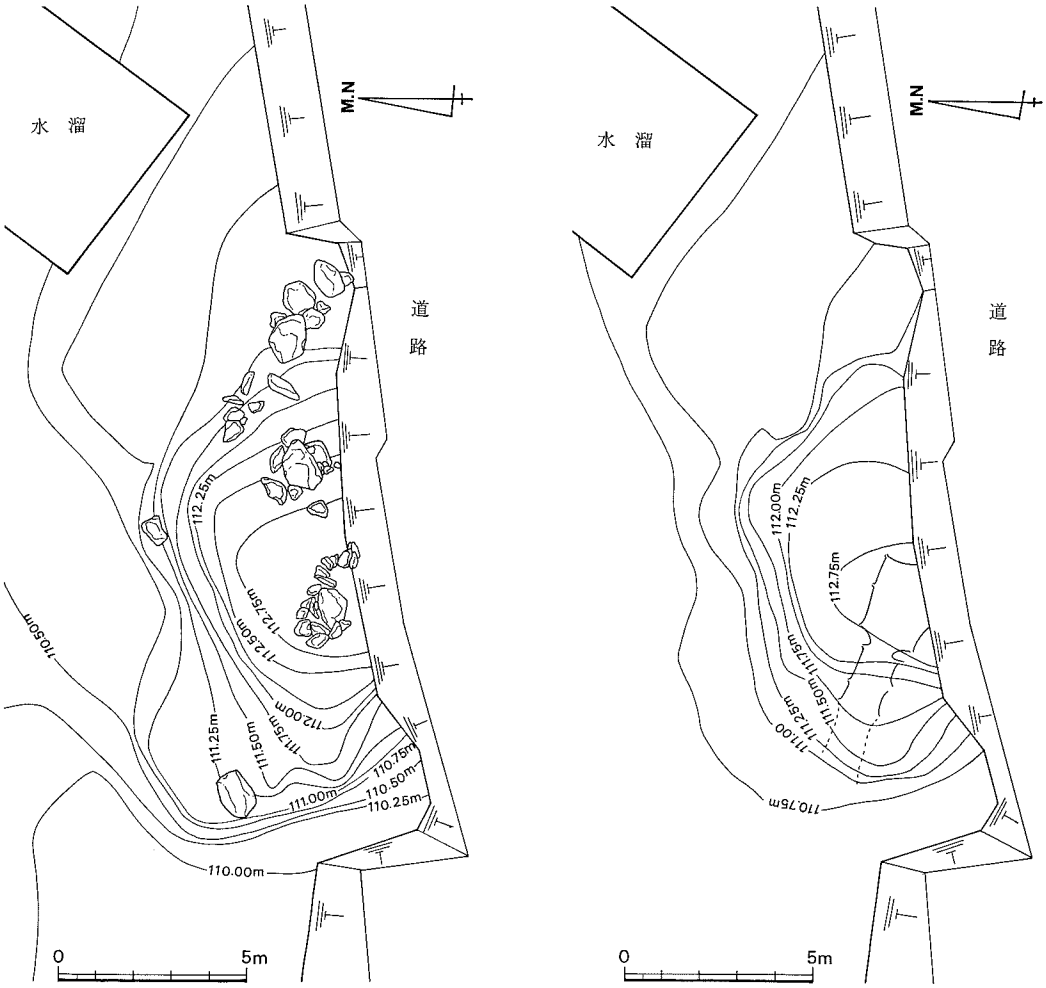


第4図 周辺地形図 (1／600)

Ⅲ 調　　査

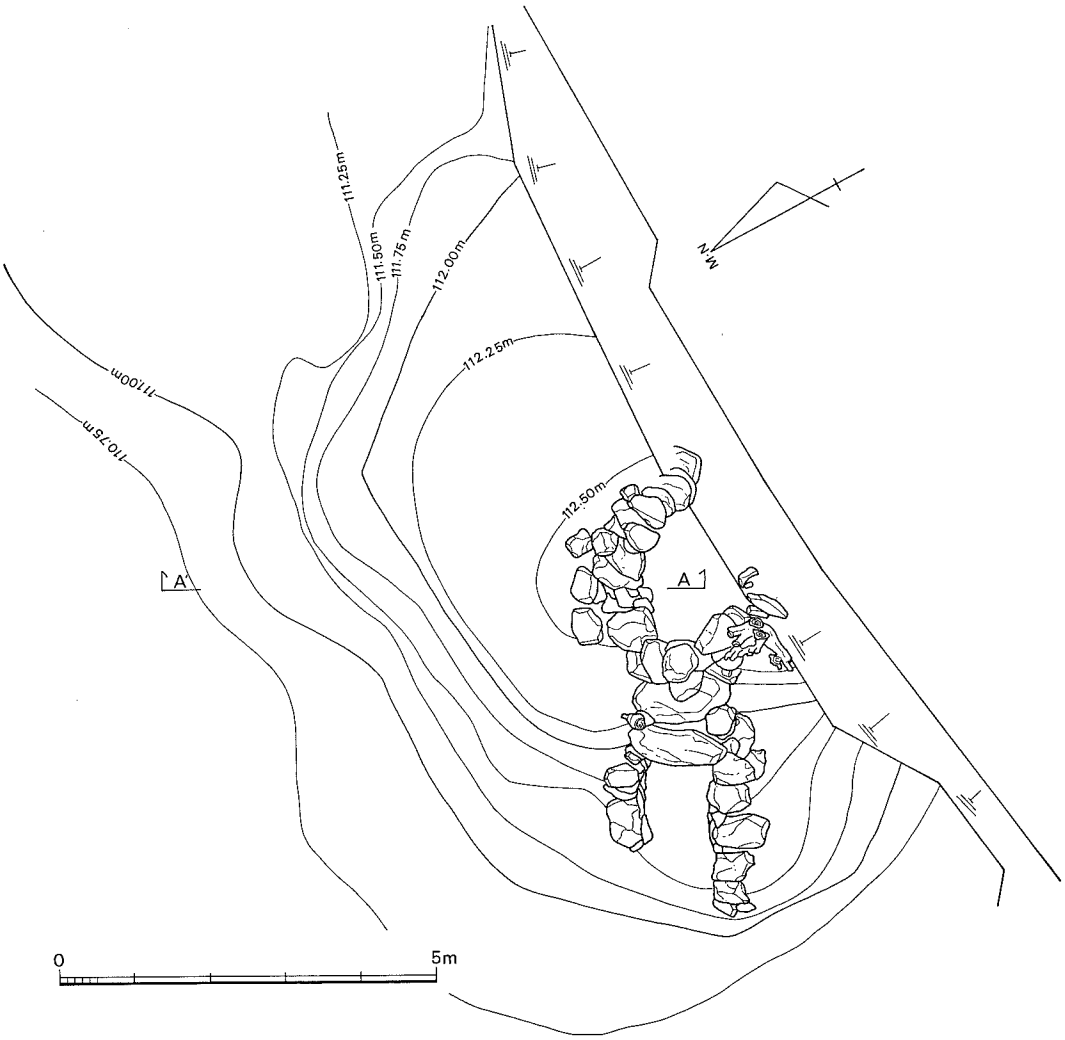
1. 墳　丘 （第５～７図，図版１・２）

カジヤバ古墳は，壱岐特有の低平でなだらかな玄武岩丘陵上に立地し，標高は110ｍを測る。周辺は島内でも有数の古墳密集地帯で，当古墳もその一角に位置する。調査前，一帯は竹林であったが，度重なる耕地整理のおかげで，今ではすっかり様相も変わってきている。特に西側では，現地表面から30～50㎝も削平され，畑地と化している。また，東側はミカン畑用のポンプ小屋や水溜が作られ，古墳近くまで迫っている。北側の雑木林にかけての部分がかろうじて大きな破壊をまぬがれているといった程度か。この中には径約10ｍ，高さ約1.5ｍの高まりがあって，古墳かと思われる。かつては群集していたのであろう。一方，南側は町道建設工事のた

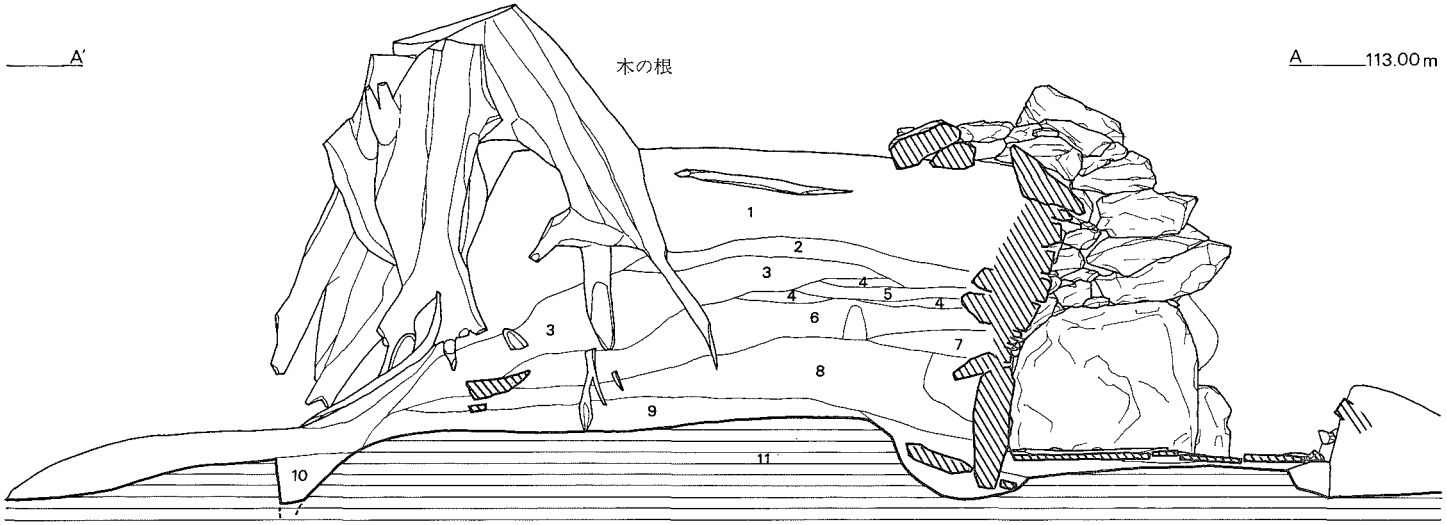


第５図　墳丘実測図（左：調査前，右：調査後）　（1／200）

め，幅約1.5m，高さ約5mにわたって丘陵が大きく切断されている。それに伴い墳丘も半裁，崖面には石室が露出するという惨憺たる状態であった。このような悪条件が重なり，当墳の墳裾は大小の掘削，撹乱等著しく，原形をとどめるには至っていない。実際の調査でも周溝は検出されず，内部主体と，そのまわりの盛土を残して，かなりの部分に削平が及んでいたことが知られるのみである。また，墳丘の頂部でも1枚の天井石が玄室内部へ落ち込み，土砂と一緒に埋もれていた。墳丘東側にも天井石と思われる大石は点在し，早くから削平は受けていたのであろう。工事による半壊を被る以前から，当墳は崩壊の危機にあったと言える。あえて墳丘規模を復原するなら，残存する部分から判断して，径11m前後，高さ3m前後になろうか。



第6図 石 室 平 面 図 (1/100)



1 灰茶色土(やわらかい)
2 濁黄褐色土
3 茶黒色土
4 濁黄褐色土(2と同様な土で、ブロック状に入る。)
5 灰黒色土
6 黄色塊含み、茶褐色土
7 灰黒色土(5に比べて、固くしまっている。)
8 灰黒色ブロック混在、濁黄色土
9 灰黒色土(やわらかい)
10 濁灰黄色粘質土(落ち込み、木の根?)
11 黄色粘質土=地山

0 2m

第7図 墳 丘 断 面 実 測 図 (1/40)

周囲の等高線から察すると，地形は緩やかに西側への傾斜を示す。古墳の石室はそれと直交する形で構築されているため，若干の地山整形は必要であったかもしれない。今では明確にはうかがい知れない。

墳丘は，旧地表面上から1.4m程残っていた。天井石部分以上の盛土は削平されている。墳丘の断面観察から古墳の構築法を推定すると，まず旧地表面からやや大きめの墓壙を掘り込む。その後，腰石を据え，石と土とで裏込めを行う。次に，腰石上端面までしっかりした裏込め・版築作業を行い，側壁3～4段目までは石積み，裏込め，版築を逐次繰返す。ここで直径8m程の盛土の基盤が完成する。以降，側壁最上部まで灰茶色の柔らかい土が載っているが，版築状態は土層では確認できない。この段階から化粧盛土とも考えられず，旧状ではかなりの竹藪であったことを考慮に入れるならば，竹の根による撹乱を土層が受けていたのかもしれない。仮にそうなら，確実に版築が残存するのは旧地表面上から約1.0mということになる。天井石等の上部構造が削平されたために，墳丘の表層も荒され，持送り状を呈する内部構造へも何らかの影響があったであろう。外面同様，内部崩壊も，目に触れない部分で，早くから進んでいたのではないだろうか。

2. 主体部 （第8・9図，図版3・4）

当墳の主体部は，単室両袖式の横穴式石室である。石室全長は羨道端部までで5.7mを測り，主軸はN—70°—Wで，西北西に開口する。調査当初の予想とは異なり，石室は天井部と南東隅の奥壁～側壁部分1/4程を欠いただけで，他は比較的良好に残存していた。玄室の規模を推定，復原すると，長さ2.1m，幅1.6～1.7mになろうか。玄門側の幅1.55m。奥壁側の幅は不明だが，玄門側よりもやや広くなると思われる。全体では，羽子板状の長方形プランを呈する。また，削平された天井部までは，石積みの残存状況から判断して，少なくとも1.7m以上はあったであろう。腰石は左側壁に2枚あり，南東隅を欠く奥壁，右側壁もそれぞれ2枚，2～3枚の腰石があったと考えられる。石室掘り方は，長軸で4.7m，短軸は2.8m前後か。奥壁部では深さ50～60cmを測る。作業上の安全性が十分に得られなかったため，奥壁方向の墳丘カット，掘り方検出を一部断念した。腰石は，掘り方からさらに10～15m程掘りくぼめられたやや広めの穴の中に据えられる。支えには小さな塊石を用い，土で念入りにつき固めている。側壁は腰石上端面から塊石を徐々に持送りし，小口積みを行う。隙間は塊石の小破片で埋められる。玄室内にはかなり石がせり出しているが，天井石という要石を失ったせいで壁面が崩壊しやすくなっているのであろう。奥壁と玄門楣石の上部石積みは，側壁と比べて幾分大きな塊石を積んでおり，主軸方向ではかなり堅牢な作りとなっていることがうかがえる。玄室床面は厚さ2～3cmの扁平な板石が，一部分を除いて全面に敷かれている。北西隅の敷石だけは抜かれ，床面から20cm程浮いた状態で検出された。盗掘の際に何らかの形で動かされたのであろう。

玄門部では，袖石に方柱状の大石を据え，その上に楣石を懸け渡して頑丈な作りになっている。玄門幅60.5cm，玄門高90cmを測る。羨道部を画する仕切り部分には，薄手の板石を低く横長に立て置くだけで，框石と呼ぶにはあまりにも粗末な感じさえする。

閉塞部分は，羨道方向からちょうど間口大の扁平な板石を，袖石に立てかける。それに加えて，僅かな間隙を縦長の板石で二重に塞いでいる。また，これら板石の基部には3個の塊石を並べ置き，その上にも石を積み重ねるといった気の配りようである。先程の仕切り石も，閉塞石が玄室内部へ倒れ込むのを防ぐような役割があったのかもしれない。ただ，閉塞状況が各々様相を異にしていることは，数度の追葬等も考えられよう。

羨道部は長さ3.15m，幅1.0m。玄室同様上面を欠失し，天井石1枚が残る。積石の遺存状況からみて，天井部までは1.1～1.2m程であろう。敷石は見られないが，床面は固く締っている。側壁の構築は，玄室と比べてやや雑である。最下部には腰石に代わる大きな塊石を据え，その上に石を垂直に平積みする。各々の隙間は，やはり小板石の破片で充塡される。羨道内に1枚の板石があるが，これ以外に板石は認められず，玄室なり閉塞部から動かされた可能性が高い。

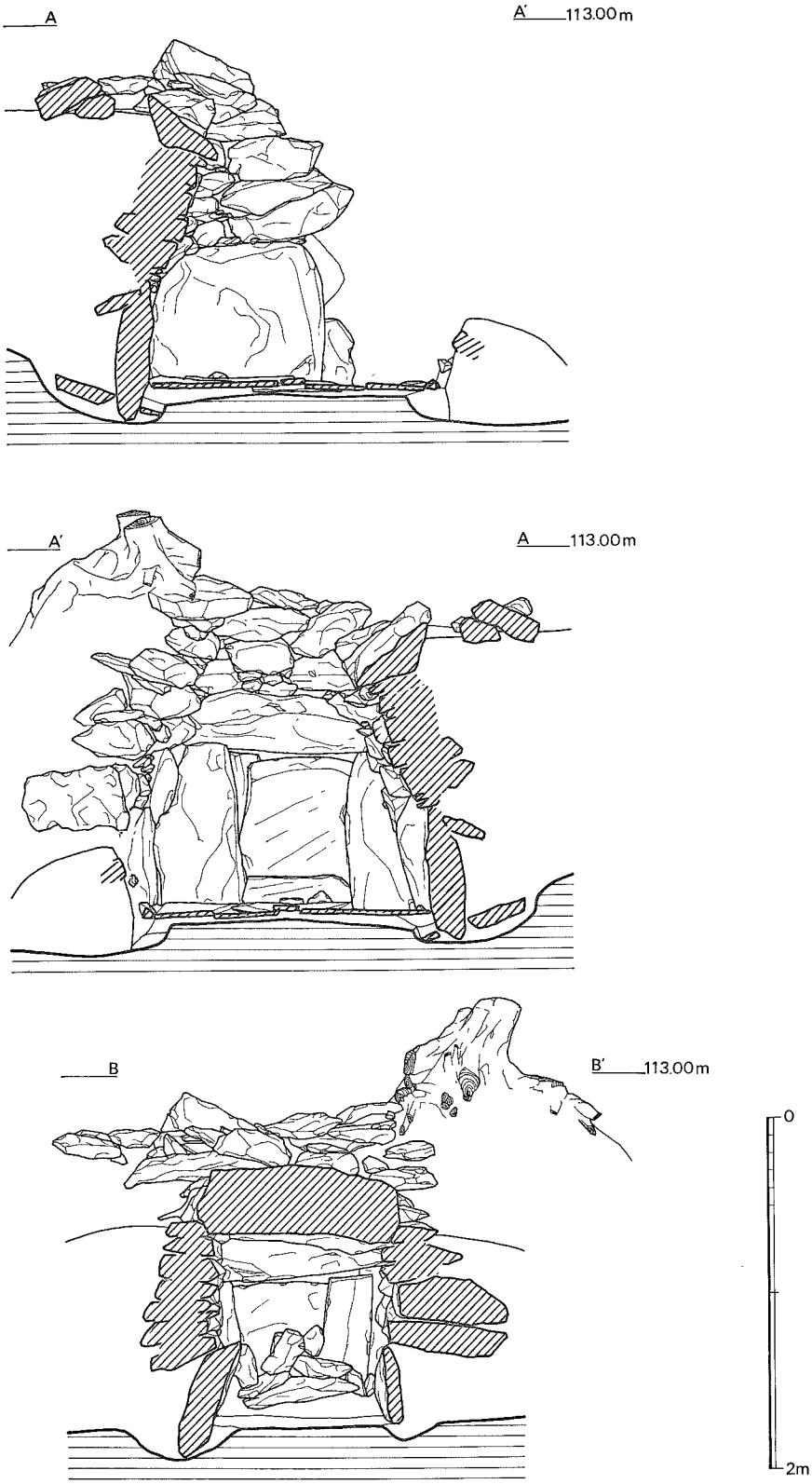
羨道部でも端の方，前庭部近くになると石積みも乱れ，一層粗雑になる。石を積むというよりも，単に置いただけという表現があてはまる。これはむしろ，盗掘等による被害を被ったためと考えた方がよいのかもしれない。石積みの上部を欠損するのも，盗掘坑を穿たれたためか。この付近で出土した須恵器の甕は，胴体部以下を大きく欠き，その破片と思わしきものが周辺に広く散乱していた。玄室，羨道とほぼ平坦であった床面は，このあたりから僅かに傾斜をみせる。また遺物も集中して出土し，祭祀が行われたことを示している。

古墳の構築に使用された石材は，ほとんどが壱岐特有の玄武岩である。塊石・板石共に灰色で，板状の節理が入る。

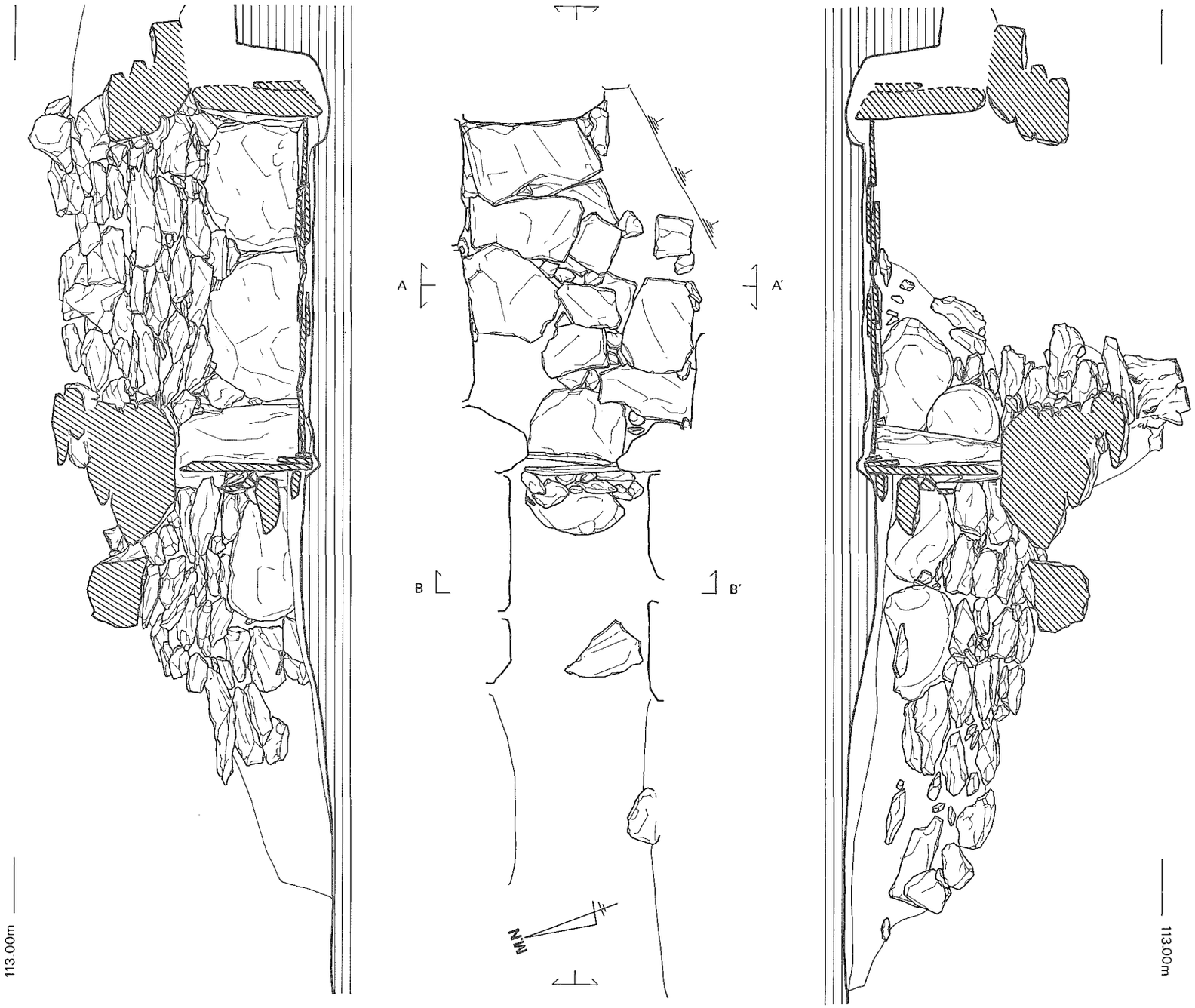
3. 遺物出土状況 （第10・11図，図版5）

カジヤバ古墳は調査当初から，墳丘半壊，頂部削平などで内部に土砂が埋めつくされた状態にあった。そのため，かなりの遺物散乱・移動があり，原位置をとどめるものは数少ない。遺物の出土がみられたのは，墳丘上面や西側裾部での表土内，内部主体では玄室部・閉塞部・羨道・前庭部の各部分からである。

玄室部では，土師器坏2点，須恵器長頸壺頸部片，鉄釘 10＋α 点，鉄鏃（？）が出土した。土師器坏は，全体の2/3程を欠失する1点が玄室内埋土中より出土。もう1点は1/3を欠損，残りは2つに割れ，床面から10cm程浮いた状態で出土した。また，須恵器長頸壺も胴部以下を欠損。頸部のみが土師器坏同様，床面10cm上で出土した。鉄釘・鉄鏃は，ほとんど床面直上の出土である。鉄釘の出土により，木棺が裾えられていたことが判明した。棺材は腐植し，その

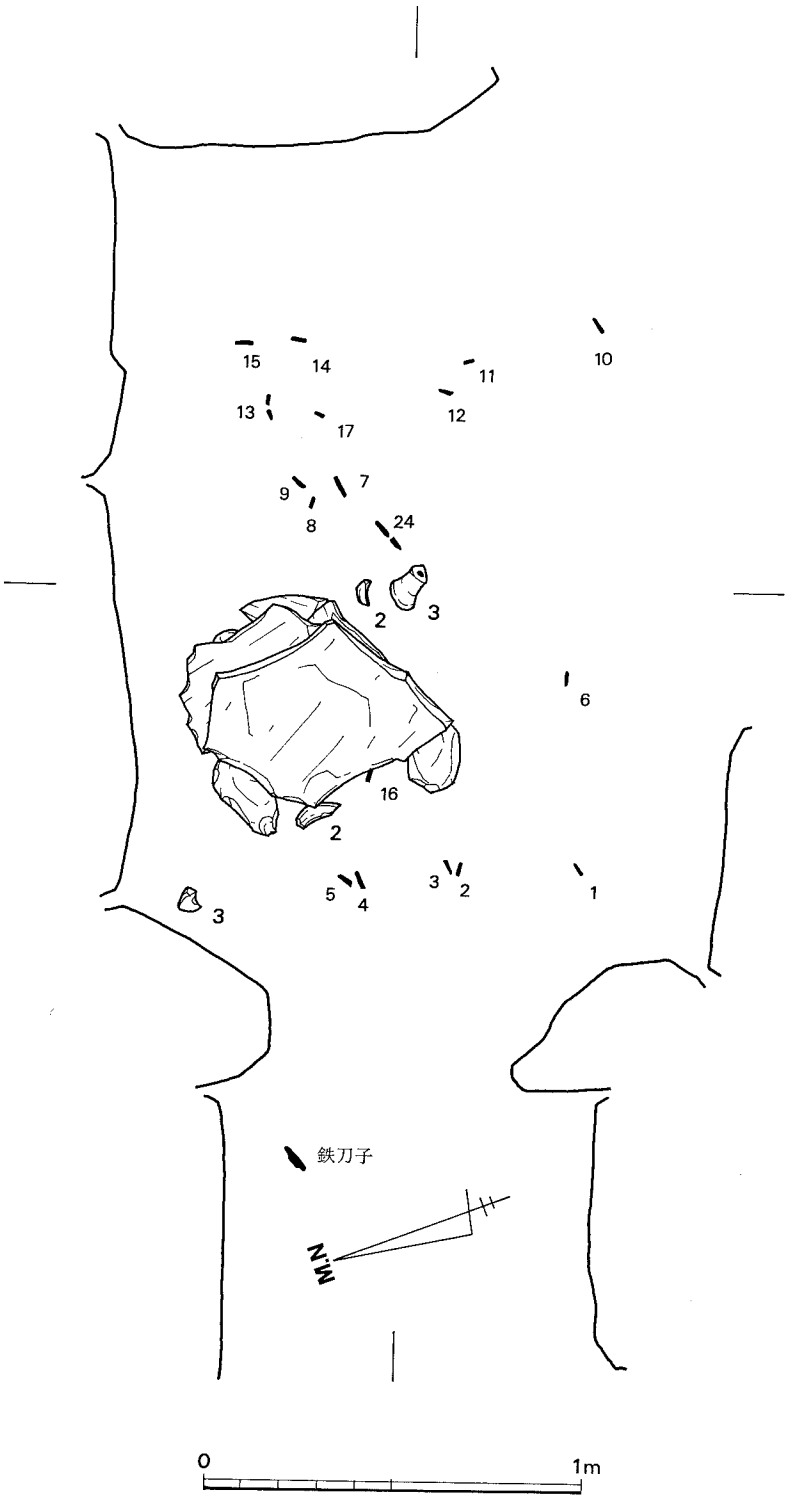


第8図　カジヤバ古墳　石室実測図①　(1／40)



0　　2m

第9図　カジヤバ古墳　石室実測図②　(1／40)

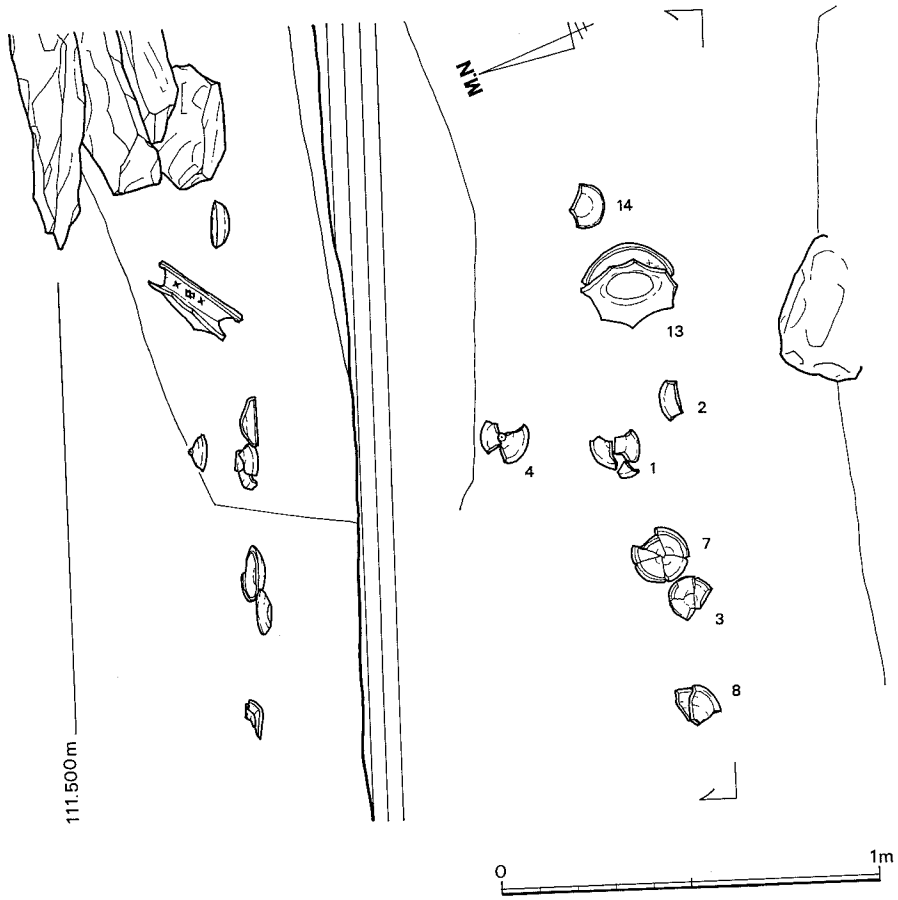


第10図　玄室内遺物出土状況　(1／20)

痕跡は釘に付着した木質によってのみ知られる。前述した土器の出土状況から察すれば，床面付近はかなり荒らされていたことが推測され，鉄釘，鉄鏃を原位置出土と考えるには無理がある。仮にこの出土状態で木棺の大きさを復原するなら，長さ約1.4m，幅0.6m前後になりそうである。鉄鏃は，玄室ほぼ中央部から１点のみ出土した。これも木棺に伴うものなのか判別し難い。なお，玄室内の遺物の上に覆いかぶさる板石は，北西隅の敷石をめくり上げたものであろう。本来は２枚あったが，埋土除去中に誤って取り上げてしまった。早くから盗掘，撹乱を受けている証左と言える。

玄門の閉塞石部分は，羨道方向から二重の石積みがなされている。鉄刀子は，その石の上に置かれるようにして出土した。玄室の入口を守る避邪としての役割があったのかもしれない。

羨道部～前庭部にかけては，玄室に近い方から，土師器坏身，須恵器甕，坏蓋，坏身，鉢？の順に出土した。遺物は，当墳の主軸と同じ一直線上に並べて置かれており，ほぼ原位置を保っているものと思われる。ただ，須恵器甕が胴体部を欠損し，墳裾に近い須恵器鉢が半壊するなど，一部に撹乱が及んでいることは否定できない。また，時期を異にする須恵器の小破片が



第11図　羨道部遺物出土状況　(1／20)

数点ほど埋土中から出土している。追葬，撹乱等の影響が考えられる。いずれにしても下部にまでは及ばず，遺物の遺存状態は比較的良好といえる。

この他，半壊した墳丘の南崖面から，鉄斧が露出状態でみつかった。出土地点が，墳丘盛土内か玄室埋土内かは不明。崖面の崩壊と共に遺物を紛失する恐れがあって，調査途中に取り上げた。

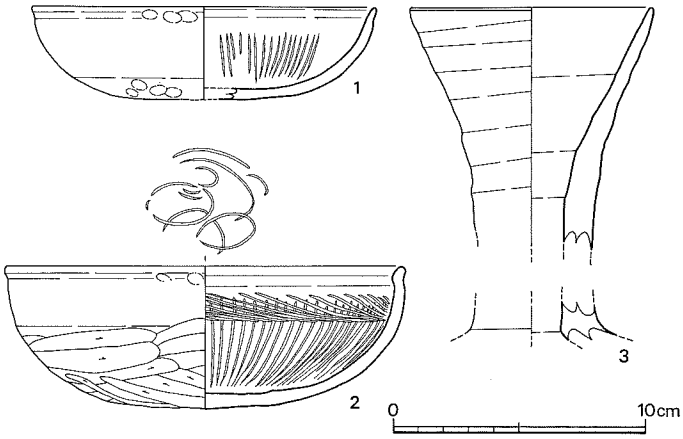
4. 出土遺物

(1) 土器

玄室内出土土器 （第12図，図版6）

土師器坏（1・2） 1は玄室内埋土中から出土した。全体の⅓程が残存。口径13.5cm，器高3.7cmを測る。底部は丸底気味で，体部下半から緩いカーブを描いて上外方に伸びる。口縁部は指でつまみ出され，端部は丸く仕上る。口縁部内端面は内側へやや傾斜をみせ，若干凹む。内面には放射状の暗文を施しているのが僅かにわかる。底部外面は未調整で，成形時の指圧痕が多数残る。底部内面はヘラミガキ。口縁部は内外面とも横ナデ，外端面にはその際生じた指擦痕が残る。胎土はほとんど砂粒を含まず，精錬されている。焼成は良好で堅緻。色調は橙黄褐色を呈す。2は玄室床面から10cm程浮いた状態で出土した。全体の⅔弱が残存，口径15.6cm器高5.7cm。1に比べるとかなり深い器形となる。丸い底部から緩やかにカーブして，すんなりと口縁部へ続く。口縁部はほぼ直立，ないしはやや外反気味か。端部付近では外へ短い屈曲も見せる。内端面は内側へ幾分傾斜し，僅かに肥厚する。底部内面中央にはラセン状暗文が，そこから口縁部にかけては二段放射状暗文が施される。底部外面から体部下半は手持ちヘラケズリ。体部上半から口縁部はナデ後ヘラミガキ。口縁部外端面下はナデ時の指擦痕が明瞭に残る。内面は全面ヘラミガキを行う。胎土は精良で砂粒を含まない。焼成は非常に良好で，硬く焼きしまる。色調は赤橙褐色を呈す。1・2共に，このあたりではあまりみられない土師器である。

須恵器長頸壺（3） 胴部以下を大きく欠損しているが，長頸壺の頸部であろう。胴肩部が明瞭に張らず，やや丸味を帯びるタイプと考える。細くしまった頸基部から口縁部にかけて，内弯気味に大きく



第12図 玄室内出土土器 (1/3)

開く。口縁端部は丸く仕上がる。調整は内外面ともに水引き成形。頸基部では一部に指圧痕が残る。全体に歪みがみられる。

羨道部出土土器　（第13図，図版６）

遺物は羨道端部に並置された状況で出土した一群（１・２・３・４・７・８・13・14）と，羨道部内埋土中から出土したもの（５・６・９・10・11・12）とに分けられる。また，14のみ土師器で，その他は全て須恵器である。以下，順を追って説明していきたい。

須恵器坏蓋（１～６）　１は口径12.4cm，器高3.9cmを測る。天井部は丸味を帯び，口縁部にかけてもなだらかなカーブを描いて続く。口縁端部は丸くおさめられる。天井部外面は⅓程を回転ヘラケズリし，そこにヘラ記号を施す。天井部内面はナデ。口縁部外面から内面にかけては水引き痕を残す。胎土は時折砂粒が混ざるものの，全体的には良質な方である。焼成は良好で堅緻。焼きぶくれが少々ある。２は口径11.8cm，器高3.9cmを測る。丸味をもつ天井部から緩やかに口縁部へ移行する。口縁端部では直立気味となり，丸く仕上がる。端部内面は幾分肥厚している。天井部は外面⅓以上を雑な回転ヘラケズリ，その後ヘラ記号が施される。口縁部外面から内面は水引き。天井部は厚く作られる。焼成は良好だが，胎土には砂粒が目立つ。３は口径11.7cm，器高4.0cm。天井部は丸く，口縁部へは大きくカーブして伸びる。口縁端部に至っては内弯気味に直下に下る。天井部外面½程を回転ヘラケズリ。以下，口縁内外面とも水引き成形。天井部内面は不整方向のナデ調整を行う。天井部は他の部分と比べて器壁が薄い。焼成はあまく，軟質でもろい。４・５は宝珠つまみをもつ坏蓋である。４は口径9.7cmで，器高3.1cm。全体に丸味を帯びるが，天井部中央はつまみ貼付のため若干凹む。口縁端部は丸く仕上がり，内面にはかえりを有する。かえりは鋭く屈曲するものの，口縁端部より下方へ張り出すことはない。天井部外面の約½は回転ヘラケズリ。口縁部内外面，天井部内面は水引き成形を行う。焼成は良好，胎土には砂粒が混ざる。作りは粗雑である。５は½を欠損。口径9.6cm，器高3.1cmを測る。４と同様全体的に丸く，天井部中央にやや崩れたつまみがつく。口縁端部は鈍く，内面には短くつまみ出されたかえりを付す。天井部は外面⅓程を回転ヘラケズリ。口縁部外面から内面は全て水引き成形。天井部内面はさらにナデを施す。胎土，焼成共に良好。６は坏蓋の口縁部片である。天井部を欠くが，その中央に擬宝珠様のつまみを有するタイプであろう。器形は扁平に近い。口縁端部は下方へ短く折り曲げられ，先端は鈍い嘴状を呈する。天井部付近はヘラケズリ調整か。他は水引きを行う。焼成は良好。

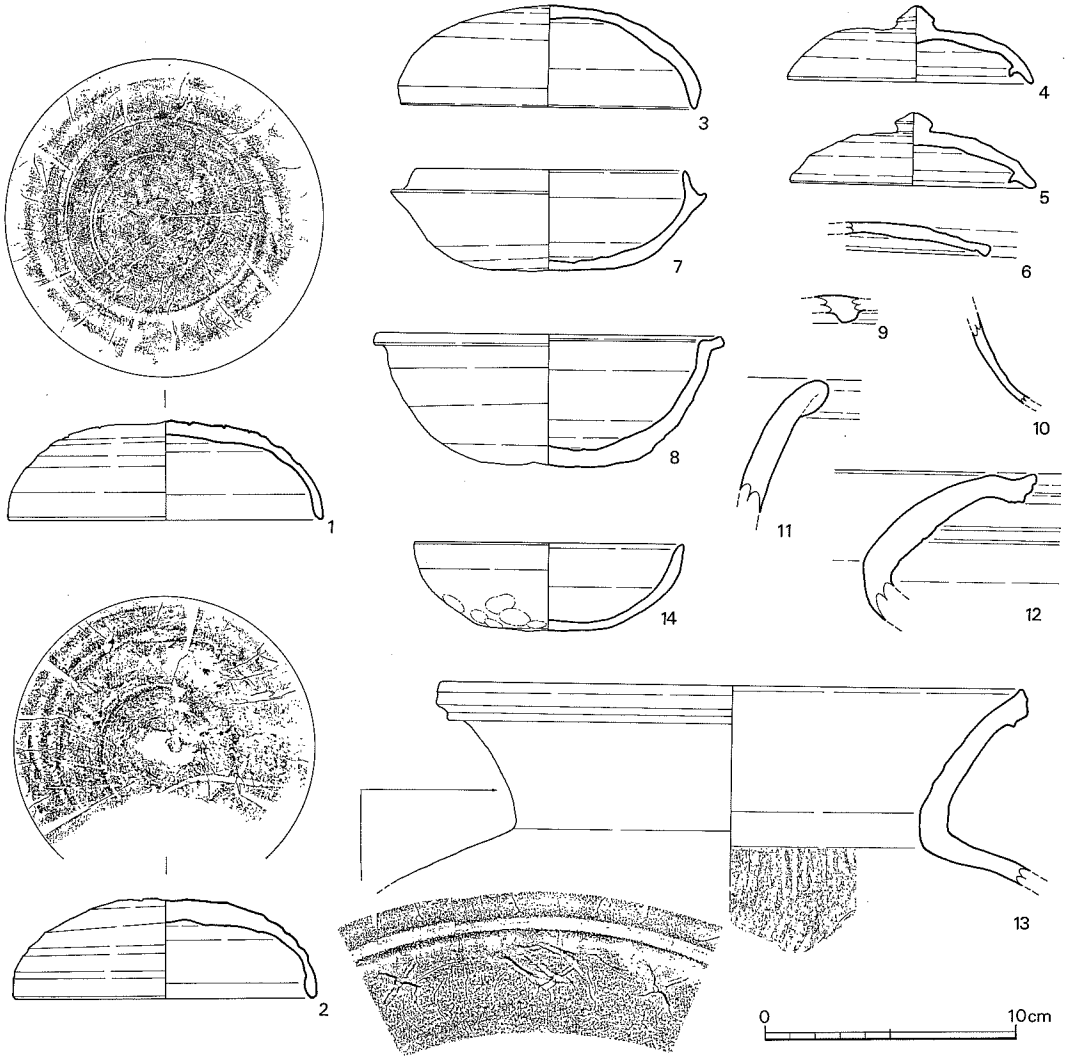
須恵器坏身（７・９）　７は口径10.7cm，器高4.0cm。丸味をもった底部から内弯気味に上方へ伸び，受部付近でやや外に開く。受部は短く外上方へ張り出す。立ち上がりは内傾し，端部は丸い。底体部外面は½程回転ヘラケズリ。受部，立ち上がりは内外面とも水引きで，底部内面には不整方向のナデが加わる。胎土には大粒の砂粒が混入し，焼成はややあまい。９は坏身の高台部分である。直立気味な八字形の低い高台を付す。内端面が接地する。調整は水引きか。

焼成不良で，胎土・色調共に瓦質風である。

須恵器鉢（8）　ここでは一応，鉢形の須恵器とした。他にあまり類例を見ないものである。口径13.6cm，器高5.2cmを測る。丸い底部から内弯気味に上方へ広がり，口縁部は外に短く屈曲する。口縁端部は丸くおさまり，内端面は内傾する凹面を呈す。底部をヘラ起こし後，外縁辺はナデとヘラケズリを併用して調整する。体部外面，口縁部，内体部は全て水引き成形。胎土には長石の細粒を含むが，比較的精良。色調は灰褐色で，焼成は良好。

須恵器高坏（10）　高坏の脚部であろう。内外面とも水引き痕が残る。胎土に砂粒を含み，焼成は堅緻。

須恵器甕（11〜13）　11は復原口径20.6cmを測る。緩やかに外反した口縁は，端部付近で外に



第13図　羨道部出土土器　(1/3)

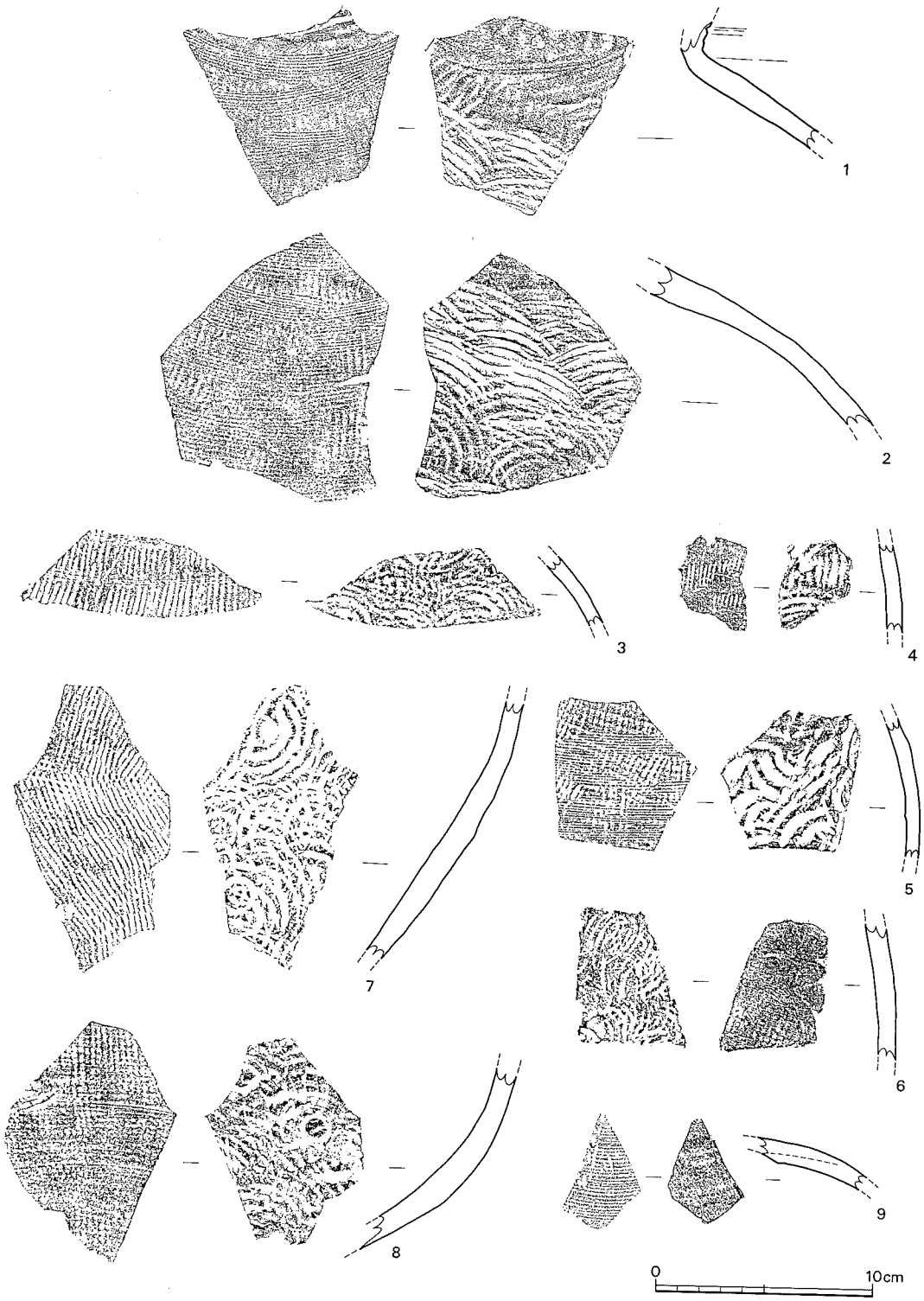
折り返され，帯状の太い突帯となる。全面水引き成形で，丸味を帯びた仕上がりである。12は復原口径25.6cm。口縁部は鋭く屈曲して大きく朝顔形に開く。端部は角張り，段をなす。口縁内端部は上外方につまみ出され，内側はやや凹む。頸部内面はナデ。それ以外は内外面とも水引きを行う。口縁部内面には灰かぶりがみられる。胎土・焼成とも良好。13は口径23.0cmを測る。口頸部は大きく外反して開く。頸部にはヘラ記号を有す。口縁端部付近では断面三角形の突帯が巡る。内端部は幾分つまみ上げられ，内面に僅かな凹みをみせる。胴部内外面はタタキをナデ消し，口頸部は内外面とも水引き成形。胎土には砂粒が混ざるが，焼成は堅緻。

土師器坏（14）　羨道部で土師器はこの１点のみである。口径10.6cm，器高3.5cmを測り，ほぼ完形。丸底に近い底部から内弯しつつ緩く立ち上がり，口縁部へと移行する。口縁部はほぼ直立か，または外反気味。端部は丸くおさまる。体部下半には多数の指圧痕がつく。口縁部はナデか。内外面とも風化が著しい。胎土はきめ細かく良質。焼成は普通か，やや甘い。色調は橙褐色を呈す。玄室内出土の土師坏と比べれば，粗雑である。

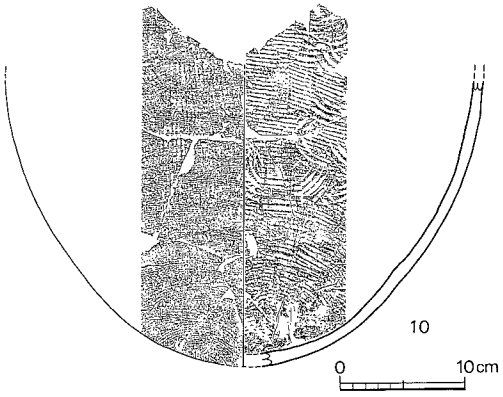
表採土器（第14・15図，図版７）

遺物は主に墳丘上面や墳丘西側裾部の表土内から出土した。いずれも須恵器の破片で，器形の判別できるもの，実測，拓本可能なものは少ない。ここでは大形破片のみを取扱った。

１は甕の頸部から胴部にかけての破片である。胴体部は大きく張るものと考える。頸部外面には水引き痕が残る。胴部外面は平行タタキの後カキ目を施す。頸部内面はヘラケズリ後，横にナデる。胴部内面の青海波は残る。胎土・焼成共に良好。２は胴部でも上部の部分である。外面は平行タタキの後，カキ目が入る。内面は上部にナデがあり，以下は青海波。１と同一個体になろう。３・４・５・６も胴部片である。部位不明。３は外面に細い平行タタキを加え，その上にカキ目を施す。内面は同心円の当具痕がみられる。４は外面の平行タタキを一部ナデ消す。５も外面平行タタキの後，カキ目を入れる。内面の同心円は一部ナデられる。６は外面タタキ。内面はタタキ目を半スリ消し，カキ目が入る。７・８は胴部下半の破片であろう。７は外面上位に右斜め方向のタタキが，下位には左斜め方向のタタキが施される。内面は同心円の当具痕をみる。８は外面平行タタキの後，カキ目。内面は同心円を一部ナデる。９は平瓶・提瓶等の胴体部中央付近であろう。外面はカキ目が巡り，内面には水引き痕が残る。断面で見ると，上部に粘土を充塡していることが判る。10は胴体底部である。丸い底部から大きく開く形状を示す。外面は平行タタキを一部ナデ消し，底部付近ではほとんどナデ消される。その後荒いカキ目を施す。内面は胴部下半まで同心円，底部までは平行タタキ目が重複して残る。底部内面はタタキ目を指でナデ，意識的に作り出す。胎土・焼成等１・２に似る。同一個体の可能性もあろう。



第14図　カジヤバ古墳　表採土器①　(1／3)

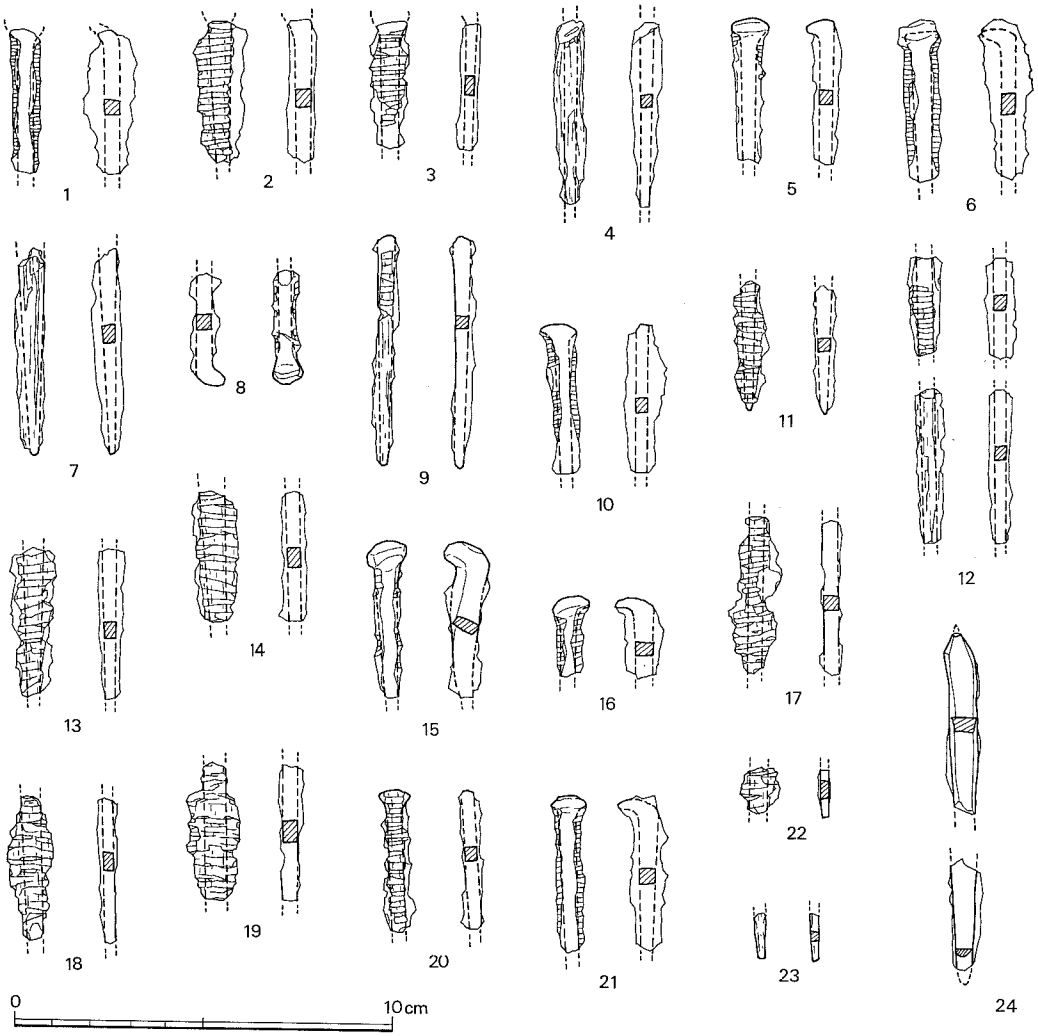


第15図　カジヤバ古墳　表採土器②　(1／6)

(2)　鉄器

玄室内出土鉄器　(第16図，図版８)

鉄釘（１～23）　鉄釘は全部で23点を図示した。内訳は，頭部が残るもの８点，頭部付近が残るもの３点。頭部と先端部を欠くもの８点，先端部が残るもの４点で完形品はない。確実な点数は，少なくとも頭部方向の残存する11＋α点となろう。釘の形は断面方形か長方形を呈し，厚さは３～４㎜。



第16図　玄室内出土鉄器　(1／2)

頭部は叩かれて，直角ないし鋭角に曲げられる。全長の知れる釘はないが，残存するものでは3～4cm台が最も多い。9・12など6cm以上を測るものもある。釘身のほとんどには木質の付着がみられた。ヨコ方向の木目をもつもの，タテ方向の木目をもつもの，上半部がヨコ方向，下半部がタテ方向の木目をもつものがある。しかし，釘はそれぞれ上半部・下半部を欠失し，木棺の棺材組合せ方法を復原するまでには至らなかった。

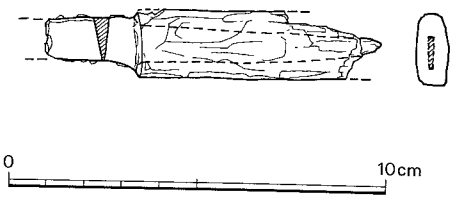
鉄鏃（24）　全体の形状を知り得ず，この一点のみ木質が付着していないため鉄鏃とした。鋒先が丸くなり，細根の長い類か。鋒部は片丸造りで，茎部は断面方形をなす。片丸造柳葉式と考えられる。

閉塞部出土鉄器　（第17図，図版18）

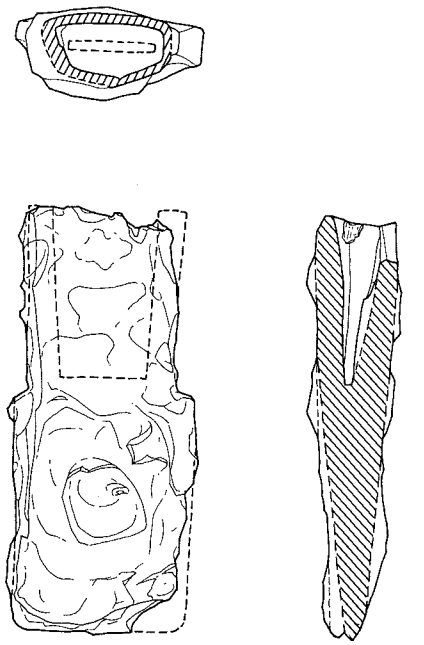
鉄刀子　身の先端部を欠き，残存長2.5cm。細い身から関際で最大幅1.4cmとなる。茎部は比較的残りがよく，長さ6.4cm。表面には木質が銹着する。身部と茎部はほぼ直線的な作りである。

その他の鉄器　（第18図，図版8）

鉄斧　鍛造の有袋鉄斧である。全長11.4cm。復原刃部幅4.6cmを測る。刃部から5.1cmのところで明瞭な肩がつく。袋部は幅2.8cm，長さ4.5cmの台形状を呈する。袋部内は僅かに木質が残り鉄片の付着もみられる。墳丘崖面より出土した。



第17図　閉塞部出土鉄器　(1／2)



第18図　カジヤバ古墳出土鉄器　(1／2)

Ⅳ まとめ

カジヤバ古墳を総括すると次のようなことが言える。

道路工事による丘陵切断で墳丘は半壊，石室も南東隅の1/4程を欠失する。墳丘は頂部と裾部で撹乱が著しく，周溝等を確認するには至らなかったが，およそ径11m前後の円墳となろう。また，盛土は腰石上3～4段目まで版築が良好に残存し，それ以上は締りのないパサパサの土となる。竹の根が墳丘中深く張りわたり，土層が乱れたのであろうか。

内部主体は，主軸をN—70°—Wにとり，西北西に開口する単室両袖式の横穴式石室である。全長5.7mを測り，玄室では長さ2.1m，幅1.6m～1.7mの長方形プランを呈する。巨石を用いた大型石室墳の多いこの島では，石も小振りで規模の小さな古墳といえるだろう。石室の構築は，天井部にかけて塊石をドーム状に持送るタイプで，島内の古墳にほぼ共通する。当墳と似た石室規模・構造をもつものに，シオユカケ古墳・大原1号墳・長野古墳（いずれも芦辺町）などが挙げられる。玄室内には鉄釘が出土し，木棺の安置されていたことが知られた。これまで石棺が置かれることはあったが，木棺例は今回が初めてである。もとより，壱岐では正式な発掘調査の行われていない古墳が多く，今後資料の増加も見込めるであろう。閉塞石，羨道部は比較的良好に残存している。ただ羨道端部で石積みの乱れが目立ち，盗掘を思わせる。

さて，当古墳の年代的位置付けであるが，これについて出土遺物の面から少々検討を加えてみたい。遺物がまとまって出土したのは，玄室内及び羨道部分である。墳丘上面や周辺の表採遺物の中には小破片ばかり多く，時期の知れるものは含まれていない。玄室では土師器坏2点と須恵器長頸壷が出土した。土師器の坏はいずれも暗文が施され，あまり類を見ないものである。九州でも暗文手法は7世紀代を通じてみられるが，量的に少ないと言われている。(註1) 2の坏の場合，胎土はほとんど砂粒を含まず精製され，焼成も堅緻。底部外面の手持ちヘラケズリや口縁部の丁寧なヘラミガキは，在地の土師器とは形態・技法的にも明らかに異なるものである。畿内からの搬入品(註2)である可能性も考えられよう。仮に，西弘海氏の分類(註3)に従えば，坏CⅠ類に属するものとなる。径高指数(註4)は36.5を示し，法量では飛鳥Ⅰ期(註5)と飛鳥Ⅱ期(註6)の中間的形態をもつ。調整手法からみると，第Ⅱ期から出現するとされる二段放射状暗文が施されており，概ね7世紀前半代に比定できよう。一方，1の坏は全体に2ほどの精緻さがみられない。底部は未調整で指圧痕を残し，外面のヘラミガキは省略される。畿内の特徴と一部合致するところはあるものの，在地で精密にコピーされた土器かもしれない。今の段階では，畿内系の要素をもった在地の土師器としておきたい。西氏の分類(註7)では坏CⅡ類となり，径高指数は27。法量的には飛鳥Ⅲ期(註8)に相当する。調整手法では第Ⅳ期(註9)に近い様相を呈する。総じて，7世紀後半代には当てられそうである。また3の須恵器長頸壷も，ほぼそれと同時期と考えて大差ないだろう。しかしこれらのどの遺物が木棺に伴うものなのか，内部を撹乱された状態にある当墳では見当つけ難い。ともかく，木棺の安置時期は明確でないにしろ，玄室内では一応7世紀代という年代

が想定できる。次に羨道部内の遺物についてみてみよう。14は最も玄室に近い所で出土した土師器である。形態的に玄室内出土の土師器坏と似ており，これらを模倣したものと考えられる。胎土・焼成・調整法等稚拙で，在地の土器であることは否めない。玄室内の土器とほぼ期を一にして置かれたものであろう。それ以外の須恵器は，一部の例外を除いて小田富士雄氏編年のⅣ・Ⅴ期におさまりそうである。当墳の初築の時期も，大方この頃にもってこられるだろう。8は須恵器の鉢としたが，あまり例をみない器形である。対馬のコフノ隈遺跡出土(註10)のものがこれと類似し，朝鮮半島製の土器として扱われている。また，慶尚南道の金海郡禮安里古墳群(註11)第49号墳出土遺物の中にも同類のものがある。この土器の場合も，形態上の類似性からではあるが半島系の可能性を示唆しておきたい。近年の小田氏の編年(註12)では，いずれも6世紀中～後半に比定されていることを申し添える。他では，やや時期の異なる土器として6の須恵器坏蓋と9の坏身高台部等が挙げられる。共に，羨道部内の埋土中から破片として出土した。8世紀代でも中～後半頃と思われ，この頃までは追葬後も墓前祭祀が行われていたのであろう。以上の検討から，古墳は6世紀後半～末頃に築造され，7世紀代には数度の追葬を経た後，8世紀後半頃まで祭祀が残ると考える。

次に被葬者の性格であるが，出土遺物も少なく深く言及することはできないものの，一応の試みだけは行ってみたい。玄室内から出土した土師器は，前述したように，畿内からの搬入品と考えられるもの，及び，その要素を持つものであった。しかもそれは，多様な器種分化と法量に規格性が認められる「律令的土器様式」(註13)の系統を引くものと想定される。このような土器が，いつ・どのようにして持ち込まれたかは知る由もないが，恐らく北部九州が畿内勢力に凌駕された段階から少しずつ浸透し始めたであろうことは想像に難くない。ましてや畿内では，「律令官人の儀式，日常生活のための土器」(註14)ともされるこの土器の搬入は，壱岐が律令体制下におかれたことを示唆する資料とも言えよう。また，周辺には壱岐島分寺跡・壱岐氏居館跡等をひかえ，これらとのかかわりも注目される。最近の研究によれば，「律令的土器様式」の成立，搬入の背景には，中央集権化を意図する古代律令国家の地方支配体制が強く反映されているとの指摘(註15)もあり，今後の検討課題の1つである。いずれにしろ，当墳の場合は資料的にも乏しく，確固たる裏付けを得るには至らなかった。とりあえずは，以上のような考え方もあるということを提示するにとどめておきたい。

これまで，カジヤバ古墳を総括的にみてきたが，壱岐の古墳はまだまだ解明されていない部分が多い。島内に密集する古墳群の性格や生活領域の問題。内的・外的な移動・交流の問題など枚挙にいとまがない。壱岐の古墳研究は，今やっと端緒についたばかりである。今回の調査が新たな古墳文化解明の契機となれば幸いである。

最後になったが，調査に際し，発掘に参加していただいた作業員の方々，派遣社会教育主事の田口唯雄氏に厚く御礼を申し上げたい。また，当墳の遺構・遺物を考察するにあたり，文化課の藤田和裕氏・宮崎貴夫氏には多大なる御指導・御教示を賜わった。記して謝意を表したい。

註1　佐藤浩司「奈良時代の須恵器と土師器――旧豊前国を中心として――」『東アジアの考古と歴史』下，岡崎敬先生退官記念論集　1987

2　西　弘海「土師様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　1982

3　奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978

4　径高指数＝(器高÷口径)×100

5　註3文献と同じ。

6　註3文献と同じ。

7　註3文献と同じ。

8　註3文献と同じ。

9　註3文献と同じ。

10　藤田和裕編『コフノ隈遺跡』上対馬町文化財調査報告書　第1集　長崎県上対馬町教育委員会1984

11　釜山大学校博物館『金海禮安里古墳群Ⅰ』釜山大学校博物館遺跡調査報告第8輯　1985

12　小田富士雄「対馬・北部九州発見の新羅土器」『古文化談叢』第19集　九州古文化研究会　1988

13　註12文献と同じ。

14　林部　均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号　1986

15　註14文献と同じ。

追記

文化庁記念物課　松村恵司氏より，畿内系土師器について貴重な御助言・御指導を賜わりました。末尾ながら，心より感謝申し上げます。

V　移築・復原作業

調査の際に墳丘の盛土や石室に使用された石材等はそのまま利用することにし，全て通し番号を記した。

天井石等不足分の石材については別途準備することになった。また石室の破壊部分については復原せずに直接石室部分が見れるようにすることになった。

復原作業は昭和62年３月23日～昭和62年３月27日（５日間）まで実施した。

復原工程　①　石室および羨道部分を約20cm程と腰石部分を更に掘り下げ，実測図通りに設置する。同様に両袖石を設置する。（バックホーにて吊り上げる）

周囲に同じ高さに土砂を積み上げ，裏側にコンクリートを流し込み固定させる。

②　石室の破壊部分の奥・側壁側に石柱（長さ２ｍ）を２本立てる。その後，奥・側壁に割石を図面通りに積み上げる。ある程度積み上げた段階で，墳丘の積み上げおよびコンクリートで固める。

また，天井石が乗っていた高さまで石材を積み上げ（一部石材補充），コンクリートで固める。

③　同様に羨道部分も積み上げる。

④　約２ｔの玄武岩の天井石を道路下（約４ｍ程下）より，クレーン車で吊り上げ石室の上に乗せる。

⑤　石室内の棺床面の板状石を敷き詰める。

⑥　その上に墳丘の形状を想定し，土砂を積み上げる。

⑦　墳丘の土をたたいて締め固める。

以上の工事工程でもって，町教育委員会は建設業者と委託契約を結び県文化課の指導で実施した。

その結果，６世紀末～７世紀にかけての時期に築造された小規模な円墳の石室構造，閉塞状況，石室内の棺床面に板状石を敷き詰めた状況等が詳細に見学出来る。また，かって壱岐島全体で約350基程の古墳が確認されているが，現存する古墳は約250基程で，破壊され少なくなる現状を考えた場合に，古墳の保存と共に復原することも十分意義があるものと考えられる。

図　　版

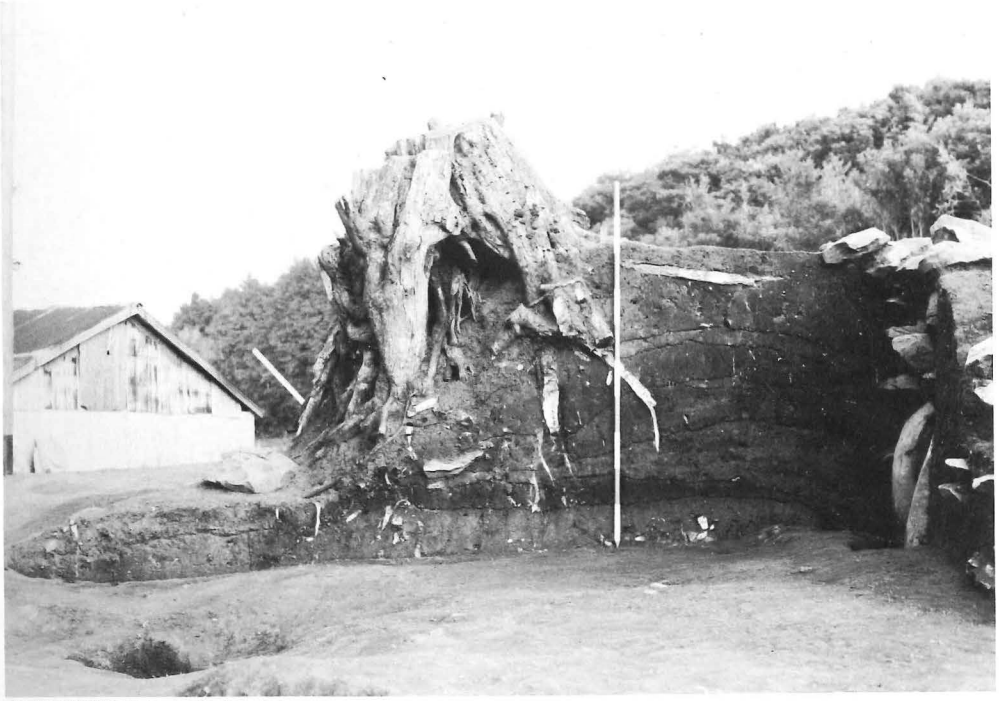
図版 1

①墳丘・調査前（西から）

②墳丘・調査後（西から）

図版 2

①墳丘断面（西から）



②墳丘断面近景（西から）

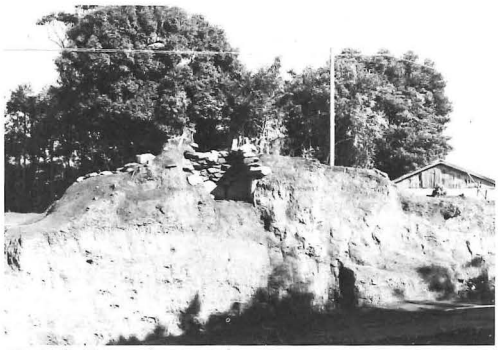
①墳丘調査前 全景（南から）

②墳丘清掃後 全景（南から）

③墳丘清掃後 全景（南東から）

④墳丘清掃後の天井石検出状況（北東から）

⑤石室検出状況（北から）



⑥玄室全景（南から）

⑦玄室全景（南東から）

⑧羨道部から玄室を望む（西から）

図版 4

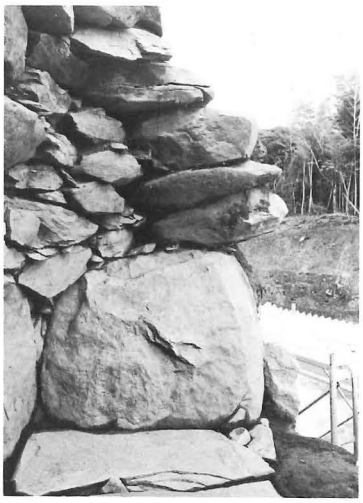
①玄室近景（南から）

②玄室北側壁（南から）

③羨道部閉塞状況（西から）

④石室掘り方（北から）

⑤玄関部
閉塞状況
（東から）

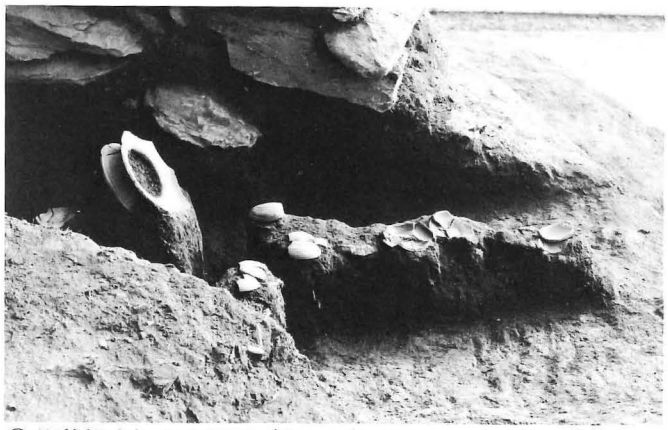


⑥玄室奥壁
（西から）

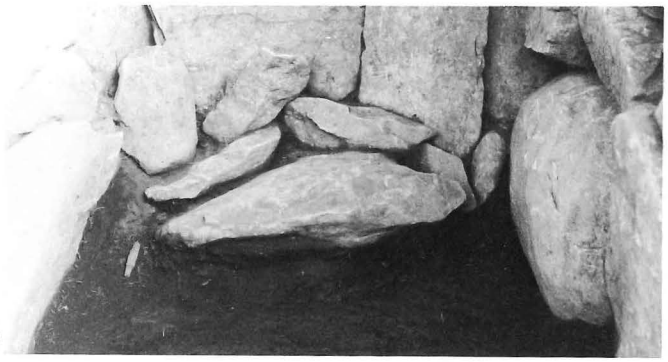
⑦玄室南側壁
（北から）

②羨道部遺物出土状況（西から）

①玄室内遺物出土状況（東から）



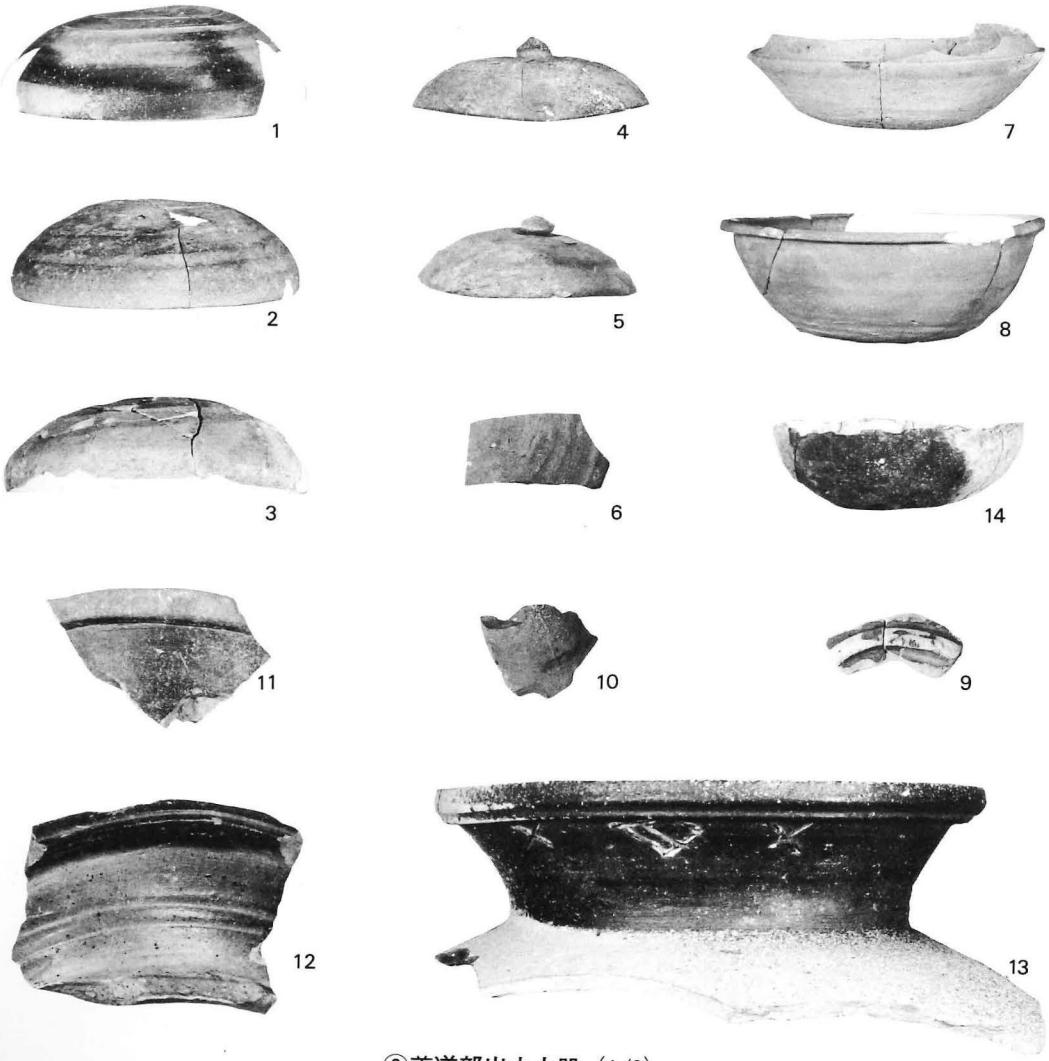
③羨道部遺物出土状況（北から）



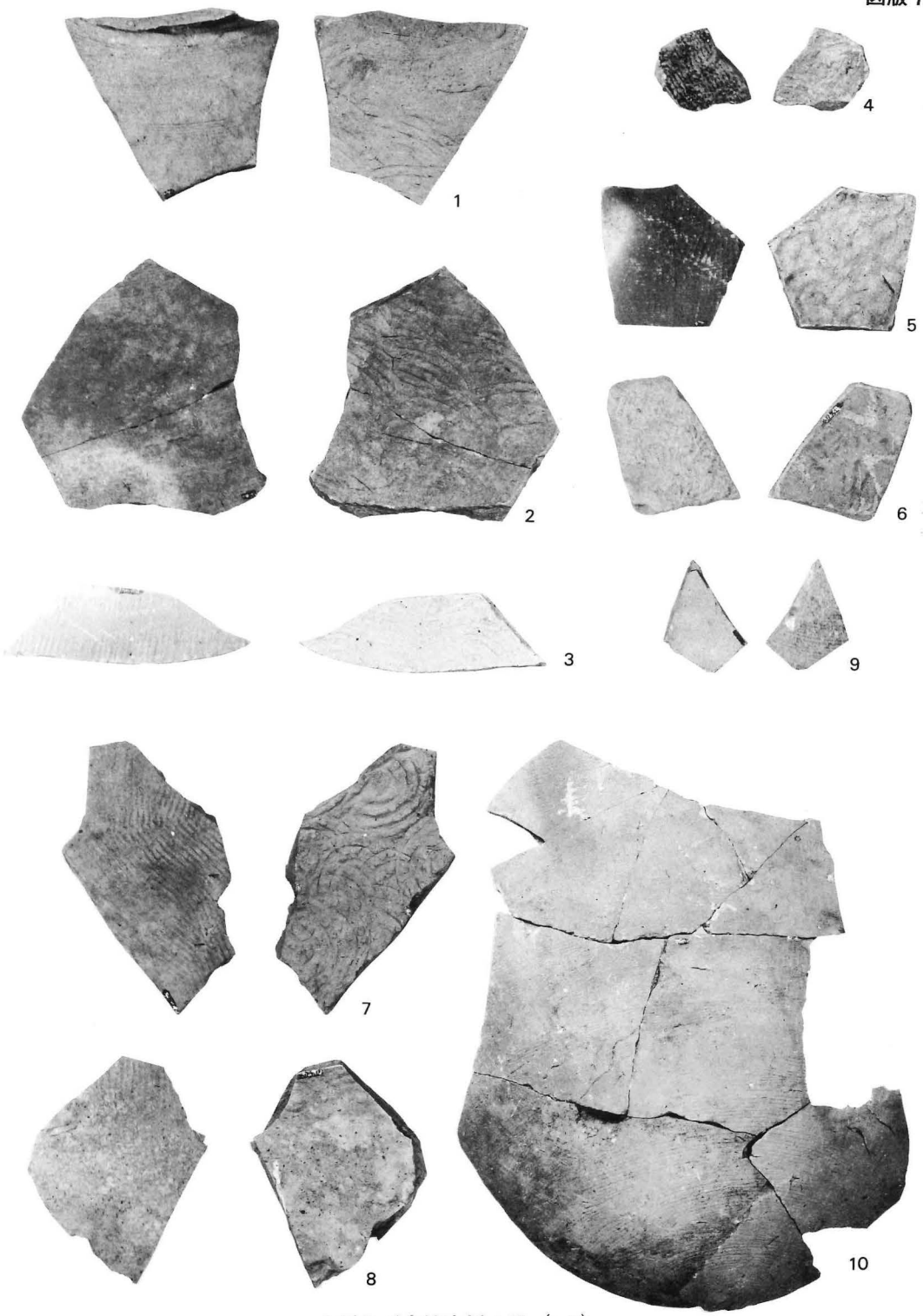
④閉塞部遺物出土状況（西から）

図版 6

①玄室内出土土器（1/3）

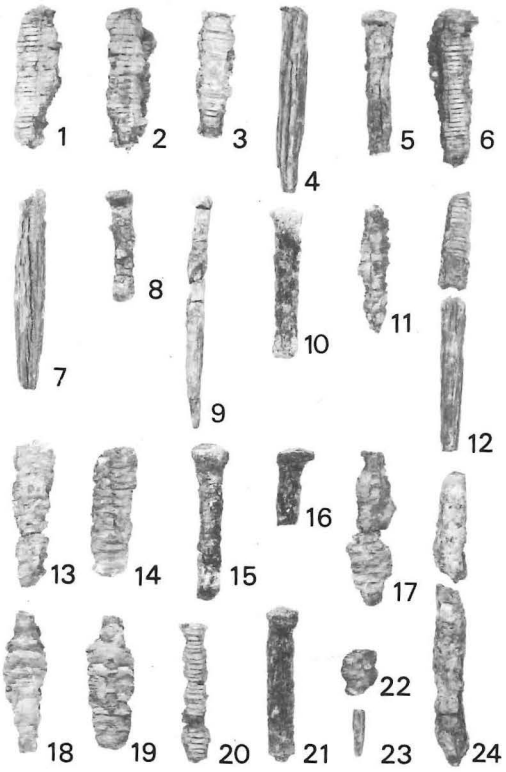


②羨道部出土土器（1/3）



カジヤバ古墳表採土器（1/3）

図版 8



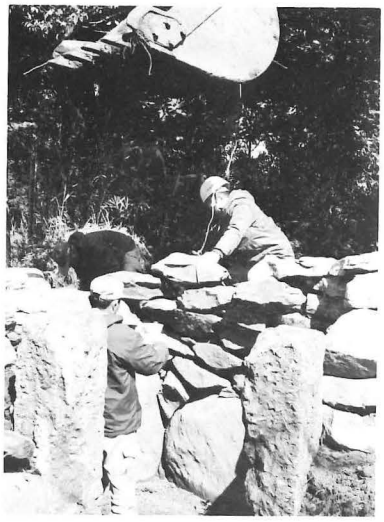
鉄釘・鉄鏃

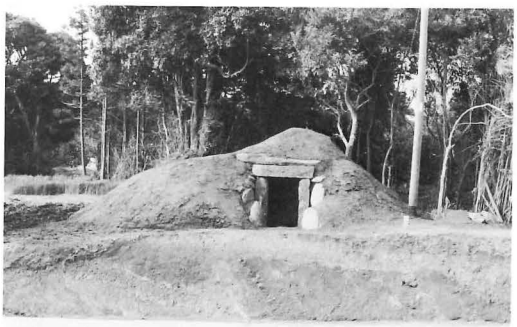
鉄 刀 子

鉄 斧

カジヤバ古墳出土鉄器（1/2）

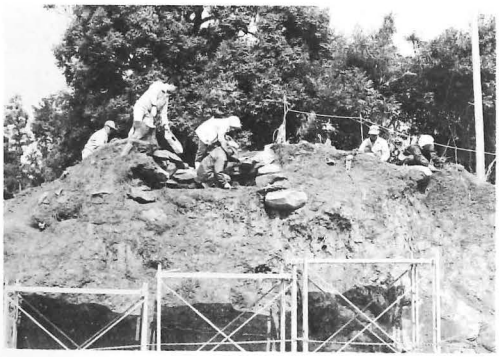
図版 9





カジヤバ古墳移築・復元作業

図版10



調 査 風 景

芦辺町文化財調査報告書　第３集

カ ジ ヤ バ 古 墳

昭和63年３月

発行　長崎県芦辺町教育委員会
〒811-53 壱岐郡芦辺町芦辺浦滝の上524

印刷　株式会社 隆　文　社
佐世保市瀬戸越３丁目４－７